金毘羅參詣名所圖會

三

金毘羅參詣名所圖會卷之二

目録

西行菴久の松の圖　西行堂　西行菴遺蹟　芭蕉塚
花の井　後嵯峨院御廟　亀山院の御塔　後宇多院の御塔
仙遊ゞ原　遊墳　大墳　金倉寺
智證大師誕生の古蹟　訶梨帝母社　不動明王出現の圖　永井の清水
甲山寺　岩窟の毘沙門天　北ニ所観音石佛　廣田の池
雲氣の神社　筆の山　筆の海　芋畑の古蹟
曼陀羅寺　西行笠掛櫻　笠松　出釈迦寺
捨身ゞ嶽　世坂　出釈迦山　大塔の旧趾
護摩壇の古趾　中山　水堂ゞ岡　西行菴の古蹟

七佛藥師堂　古驗の松　於婆の池　人面石
花立の碑　頼政箭止の松　樋戸野の池　弥谷寺
護摩嶽　道範阿闍梨の像　求聞持の岩窟　盤石の三尊
加持水の瀧　降魔の古跡　六本杉　十王堂
中院　茶堂　法雲橋手掛岩　比丘尼谷　二天門　二王門
薄項川　瓶岩　生駒一正侯の塔　香川累代の墓
山崎俊家の塔　山崎志州祖母の塔　大塔四郎右門の塔　穴薬師堂
天霧山の古城　香川長曽我部和親之圖　勝間の石の大塔
本山寺　高良の神社　本山寺古盌　神照寺
植田の松の圖　琴弾八幡宮　任吉三神の社　若宮権現の社
大師堂　上の菴　九重の石の塔　鐘撞　中之菴

瀧宮風宮天神社　鹿島の神社　一之鳥居二之鳥居　宿居
十王堂　下之菴　梅腋の濱　琵琶の首　深川　三架橋
放生川　三本松　象が鼻
問答石　西金堂　竹の溪
愛染堂大師堂　五所権現の社　観音寺　中金堂
太子堂　籠堂　二王門　室塔の四跡遍照塔　弥勒堂
五智如来石像　有明の濱　青丹明神社　茶堂摂待所
芭蕉翁早苗塚　悪魔石　天神社稲荷社　日燈上人の墓
山口の清水　高谷神社　漁夫網曳の圖　観音寺川口
高稲積山　燧灘　九瓶島　伊吹嶋　大嶋
伊勢二郎智謀之古趾　同圖　不動の瀧　一夜菴

西行庵の遺跡
久乃松
西行堂
西行庵

西行庵之遺跡

善通寺南大門の西二丁許にあり

久之松

庵の前にあり大木の老樹なり幹の圍凡四拘ばかりあり傳ふ西行法師の植られし庵のすゑ小松のそだちけるとかや

山家集

久に経て我のちの世をとへよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ　西行

一本ニハ　行末のぶべき人もなき身ニト有

同

ここを又我すみうくてうかれなば松はひとりにならんとすらん　仝

此松の本に標石あり正面に西行上人出居の地久の松ト鐫れ

同銘ニ

契りおきて西へ行ける跡に来て我もあるじの残れ松の下かげ　道範上人

一本ニハ下影ト有

久の松の下にあり萱葺の小堂にて内に西行上人の石の坐像を安ず　長凡二尺許

西行堂

西上人傳云

今の世も道に志ある人ハあくまで是後も西行上人を慕へるとぞあがめられ枚挙して記しがたし人形までも作られ行脚の姿おもかげをうつし此るも見られれ尋ねるつくね御手に紙衣の中に結ぶとて思ひなされのひはず千載の後十八代の勅撰の集にかけ給ひ何をもても西行法師と称し

なほ新千載十二代集に二のうたハ西行上人と侍り夫木抄にハ上人の位のおハしまさぬ法師にハあれども西上人ぞかりハ二百八十余首を皆上人との給ハれなりそれぞれ作者部類にハ凡偕の入道の部に入られり是勿論の事なりと撰るを此集をよび続抄に上人と書来たり是奇の緒を以てまた出なり上の字のくらゐ記よ聖徳字をよぞれ行ふとし御在世の時よりなり後成卿ハ長秋詠草に圓位聖人と記りくかき給へり又定家卿文字を正しく親行く清書をあつらへられし拾遺にハ圓位聖人と書のみなるのくしては大僧正慈鎮和尚の拾玉集にも圓位聖人寂蓮などとあり此弁伝達の聖の字を書のこともいるべきなれ徳隣の西行ハ此すこしの椿者ありて勅書まではさんどの殿上のれいにあれハ在世よりも雲井にても上人とも称し書に聖人とも呼れのかるべし況や没後にや其後の抄物辺ころの諸集に西上人など尋く行り今の世尚ハ聖人と書べきなり大和尚位継上人位継ホの私の見侍ると彼奇仙ぞ聖人とのみよしハ奇のいはれもしるしわしての崇敬あるべし

頓阿云　秘賢僧正の孫ぶより住吉の社に百日参籠まして赤明神の御姿を拝し奉らんと祈念ーしに遠る暁に現しれて翁もええす略ろ渋の衣を社の内よりこ通れりとぞ読のことえいりて西上人ハ住吉明神なりと書るよし

あくと川の自記むりと季吟抄ゴとくくう

西行菴　今尚ほのかくに草庵と建ていうこの外とのこせう國中のはち方ゆくと爰に第

芭蕉翁の塚　西行菴のむうこの傍こいう自然石の碑と建

石面に　洮祖芭蕉翁塚ト鐫ス

花の井　西行菴の拝の前こいう濯ぎ双びもと名泉ろうト云西行上人在世こう有て手せふ爰せくれ云伝ふ

後嵯峨院御廟　若亀寺の仏殿より二十計ふ西ある正中こ石の御塔ゆう左右亀山院後宇多院の御塔と建廊の西門あって国樂恒侍ひう

日本王代一覧曰

後嵯峨院　諱邦仁土御門院ノ第二子也母ハ源通子宰相中將通宗ガ娘ナリ兼久ノ亂ニ僅ニ三歳ナリシヲ土御門ノ大納言源通方外戚ノ親ミアルニヨリテ養育シ奉ル十八歳ノ時通方卒スル故ニ祖母兼明門院ノ許ニウツリ幽カナル体ニテ御座マス仁治三年正月四條院崩シテ御子モナク御連技モナケレバ誰カ継體ノ君タルベキト沙汰アリ順德院此時佐渡國ニテ恙ナクヲハシマシ其御子忠成京ニマシマシテ藤原ノ道家ノ外

後嵯峨院御廟

左右ニ亀山院後宇多院の御塔あり

亀山院諱ハ恒仁後嵯峨院

第六ノ王子也正嘉二年八月東宮立

正元元年十一月即位

嘉元三年九月崩御壽五十三

後宇多院諱ハ世仁

亀山院ノ太子ナリ

母ハ大臣藤原實雄カ娘

姉子也後京極ノ女院ト号ス

文永四年十二月誕生同十一年正月受禪

同三年[illegible]時二八歳

正中元年六月崩御壽五十八

孫ナレバ是ヲ位ニ着申　直家相替ラズ朝廷ヲ我マニセント思ヒ關東ヘ談ゼラル恭時兼引セズ吹田城ノ介義景ヲ使トシテ上洛セシメ土御門院ノ御子ヲ御位ニ即申スベシト云合ム中畧　泰時ガ下知ニテ義景申上バ異儀ニ及ハズ同月二十日邦仁元服年二十三左大臣藤原良實加冠タリ左中辨定房理髮タリ二月政始アリ三月御即位　文永五年御落飾アリテ法皇ト号ス同九年二月十七日後嵯峨法皇崩ス歳五十三議位ノ後院中ニテ政ヲ聞コト二十年余世モシヅカナルニ依テカクノ如ク安樂ニテ終リ給フト云ク

增鏡十八　嵯峨亀山の別院藥草院小華ヲ奉るし有然れば此所御菩提の御樓の跡

仙遊ノ原　遊墳　御陵の北ニ向フ弘法大師御幼童の時遊びタハシ古跡ありしぞ今小堂あり

犬墳　地藏堂のかくれ〻ふ向ふ事實詳ならず遊考拾遺の部ニ出ル

鶏足山寶幢院金倉寺

金倉の郷ニ向フ故ニ土人金倉寺ト云フ其始ハ道善寺ト云智證大師誕生の古跡なり長二丈八寸智證大師の作座像なり本堂東むき

本尊　藥師如来

阿弥陀堂　本堂の傍ニ向フ八幡宮天滿宮相殿祠　門内の右の方池の中ニ向フ

御影堂　門内の左の奥ニあり智證大師の尊像を安ル

訶利帝母社　御影堂ニ並ぶ

新羅社　訶梨帝母の社の傍ニ向フ新羅明神を勧請ス

鐘樓　新羅社の前ニあり

二王門　金剛神の西尊を安ル東向

當寺略縁起

當寺八皇五十九代光仁天皇寶亀五年の草創ニて和氣道善の建立ニなる故ニ道善寺と号ス然るに其後醍醐天皇延長二年勅ありて金藏寺と改む金倉の郷ニ有ル故なり其境北ハ海ニ方ハ山ニて城ニ迦葉尊者乃入定ニ給ふ天竺の鶏足山の大洞ニ相似れりて鶏足山と称ス原来智證大師誕生の霊場なるが故ニ往昔盛んなる時ハ境内南北数十町東西十余町あり国中第一の伽藍なり智證大師唐ニて見の山所の繪図と示して飛騨の匠其工妙をつくしる佛殿僧房をバ世ニ金倉寺乃

唐阿堂と申せしなり然れども建武天文の兵乱に焼失し忽ちに其跡
と亡い只草堂に古佛真影と納め置のみなりしと寛永十九年　國
守伽藍を再建したもふ寺領を寄附あるべしれ再び四跡となりぬ
給ふとぞ　則四國霊場七十六番札所なり

智證大師自筆の御影　清来の曼陀羅　鏡鉢　十六善神ほか其余什
寶許多にのこりしも事多げなれば畧す

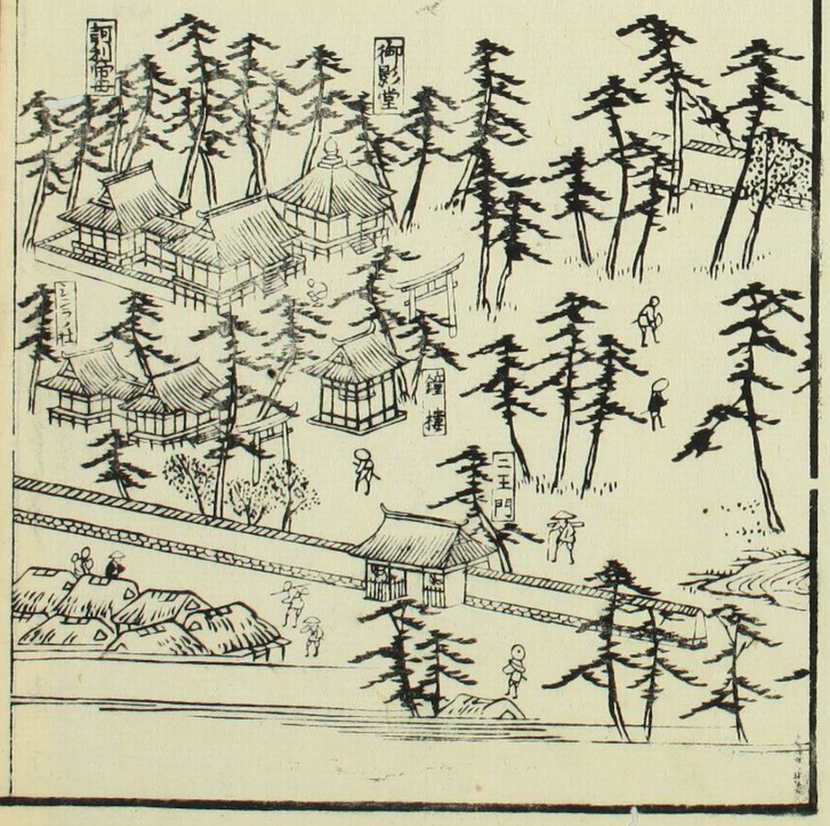
抑智證大師は當郷の出生にして名は圓珍姓は和氣氏父は宅成母は佐伯
氏なり則ち弘法大師の姪子にてありの其母夢に朝日口に入と見て
孕み弘仁六年に誕生給ふ両眼瞳重に項骨隆起して盆を覆せし如し
元性資敏言敏にして幼にして老成の量あり八歳の時父に啓して曰内
典の内因果経と言るの有べし願くは我をして練習せしめたまへと父

驚き異み即ち尋ね得て是を与ふ十歳の時毛待倫結漢書文選を讀
み十四歳にして家を離れ十五歳にして延暦寺の座主義真を師として
事ふ十九歳の時菩薩戒を受け仁明天皇寵遇盛なり廿二歳にして南
都の明経と大義を決擇し世に甚名朝野に播るさる程に山王權現の
告に因て奏を経て入唐し仁壽二年八月十五日福州の境に着く時に
唐の宣宗帝大中七年なり開元寺に寓して中天竺の那蘭陀寺の
僧般若惚羅に逢て梵字を乗ぶ兼て金剛界胎藏界諸
の印法等を授て天台山に上るに石窟ありて其洞中に石龕
あり十六智者大師説法の時これを椎て衆を集められしと傳る是
をうてども聲なし圓珍試に小石をとりて是を打つに響山谷に
震ふ諸僧驚き嘆じざるなし事なり又長安にて青龍寺の法全に

金倉寺

當山の河利帝母八
智證大師在世ゟ再
度出現ゝ ゆい教法
護持の誓願を表顯
樒の約束と互ゆゝ
ゆくゝ大師護法善
神と祈ゝ一祠を
建立ゝ奈礼せゝ
給ふ所ゝ十童驗
殊更いちじるゝと
見えようて遠近の
國ゝ郷ゝより子を

願い安産をゝ
いるゝい懐胎の事を
求ゝ又氏子ゝより
て名をもい受をも
願い除疫をゝ
祈貴とりしゝ願
祈とのぞむゝの願
成就せばゝ
ゝ ゝしゝ寺の縁起ゝ
委ゝくゝ
祭日例月十六日
大祭八九月廿八日
有信の貴賤郡郷
て大ゝふゝ



金色の不動尊
難風とゝゞむ

鴻瑜伽の密上旨及び灌頂を受て蘊に所底を倒して是を授て天
安二年高麗に乗て帰朝し肥前松浦に至り留駐をとる支凡七
年得る所の経書千餘卷を表上る貞観十年に井の圓城寺と次
て傳法灌頂道場の爲に圓珍に賜ふ又延暦寺の座主に成る寛平二
年僧都に任ず同四月廿九日逝く時に年七十八嘗て耳目聰明し
て食を物精潔を擇び門弟阿闍梨の位を受る者百余人年自
剃髪を弟子五百余人延長五年智證大師と謚賜ふ
初の唐の時難風暴に起て船異國に漂流し圓珍目を閉て不動明
王を念ぜ時に金色の人忽然として舳先に坐る須臾にして順風来て
翌日福州に着岸し則ち拜を所の像を画て命じて國に帰
り以来二井寺一流の不動尊皆金色にして其余奇特枚挙とゞ

永井清水　永井村ニ有リ土人印の清水ともつて其事実詳ならざれども永井泉りうせんと称ス迫漏ニ似ル都泉ニして四時ともに増減なし分て春の冬暑ニハ往還の旅客潤と同ス一式西風ともんぐとろ〳〵令して南ふ

醫王山寶院甲山寺　廣田村ニ有リ土人甲山寺と唱ル四国遍禮七十四番の札所なり

本尊　薬師如来　長二尺五寸座像　弘法大師の御作本堂東むき

御影堂　弘法大師の尊像を安ス本堂ニ並ぶ　鐘楼　門内傍ニ有リ　茶堂

富毘沙門天　大師堂の傍窟の内ニあり弘法大師の作厨子ハ石ニして刻む　山中ニハ西国三十三所の観音の石佛を建営ス

本坊庫裏　門内の左ニあり　石橋　門前の川ニ渡ス

當寺ハ往昔大伽藍ニして堂塔魏々ゝゝとして殿宇荒廢して其跡更ふ然れども本尊瑠璃光佛ハ大師の御作ニして霊験尚ゝ〳〵ひろし

後ハ山林繁茂して糸ハ曠野と見る〳〵田畠縞のごとく民家相接まり

廣田池　廣田村ニ有リ夫朝比奈の池と唱ル傳云昔朝比奈弥三郎と共ニ武士ニ対先ス其墳池の中ニ有リ故ニ名く然るに法華崇るゝ故ニ墳の左ニ有ル

永井の清水

一道

松の葉ニ蔭ハ

清水

泉ニ濫泉沃泉汎泉の二有リ

爾雅ニ云

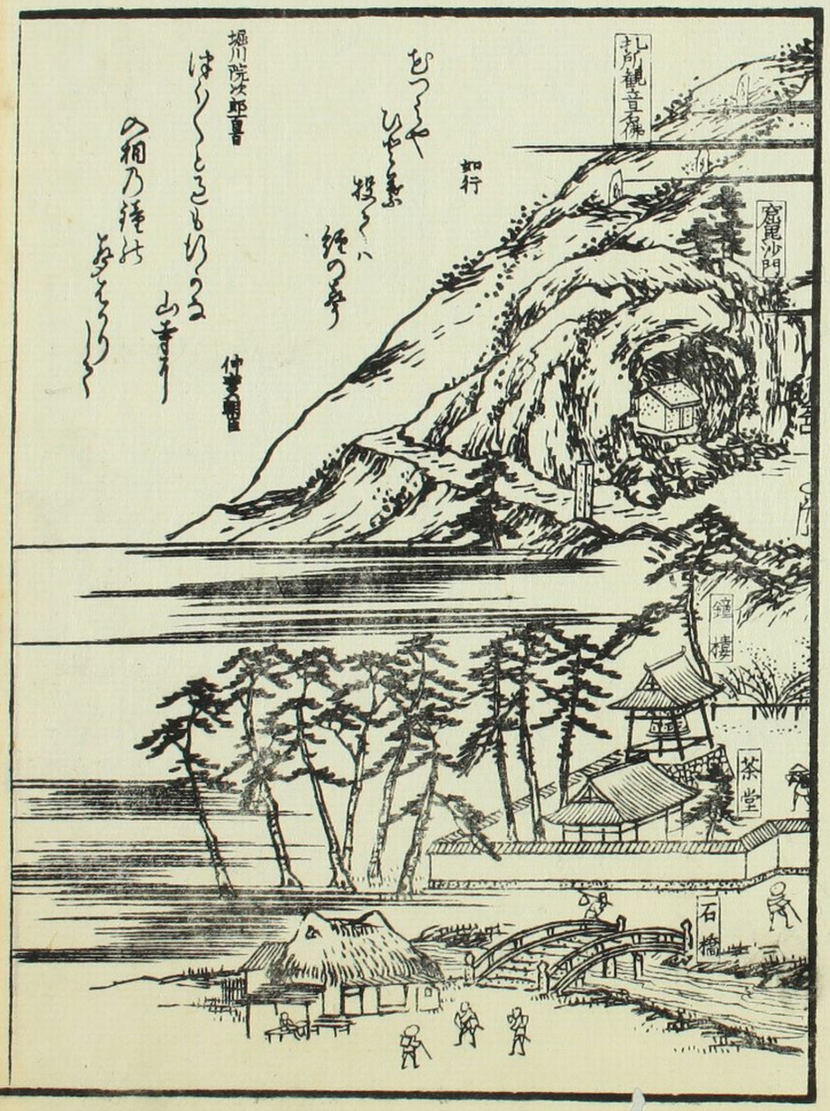
濫泉正出正出者

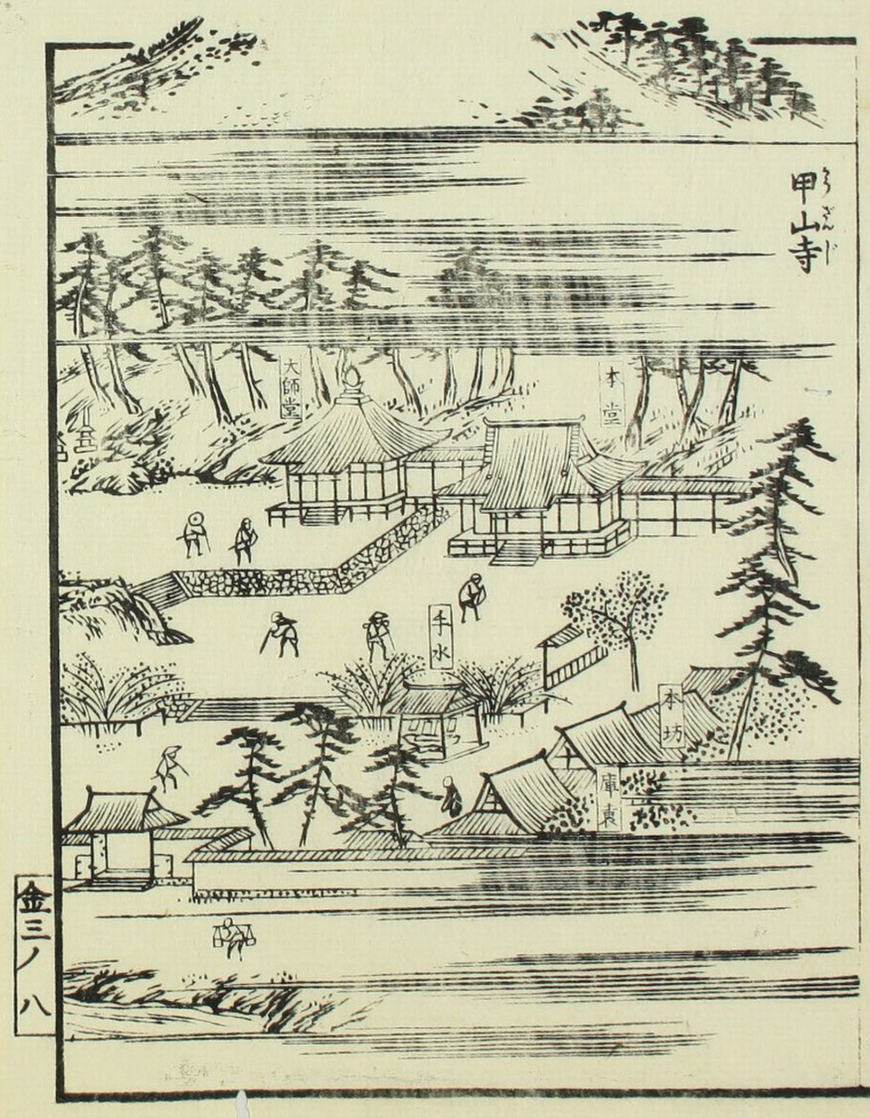
従下上出也沃泉

垂出垂出者下出也

汎泉穴出穴出者仄出也

然まハ此永井の水ハ所謂濫泉ニ


山所観音佛
窟沙門
鐘楼
茶堂
石橋
堀川院次郎書
仲麻呂書


甲山寺
大師堂
本堂
手水
本坊
庫裏
金三ノ八

雲氣神社

廣田村にあり延喜式出多度郡二座之内　後世中絶して雲氣塚とのミ古跡ありしを近ごろ再興ましまして

三代實録曰貞観元年授讃岐國雲氣神従五位下とぞ

筆の山

葭負村の向ふに高く聳ゆ

山家集

筆の山にかきのぼりても見つるかな苔の下なる岩のけしきを　西行

筆の海

同所にあり今ハ一段の田畠となりて其名のミ残れり　往昔ハ筆の山の辺まで海邊にて眼

かゝりて蔭の池などいへるありしより地名を蔭浦と名づくとぞ　滄桑うつりかはるにて

ありし道のかたハらに標の石あり苔に埋れて文字詳ならざれ

ども残りてあるまでも残る筆の海かくまで□ハしらしられかし

西行の歌りや海人の俤や尚考べし

日蓮の志らね霧や筆は海　玉光

月雪のかげや志らしき筆は海　綾物

芋畑之古跡

同村農家の垣根に標石あり左の哥を鐫る

月見よといもの子どもが祢いりしを起して来る何ぞ苦しさ　西行上人

芋畑の古跡

芋らすく月にもとらんとも敷　作者不知

芋ひとつや姉に月をむかふ水　山川

芋の葉や月まつ里乃やき畑　芭蕉

我拝師山延命院曼荼羅寺 葛原村にあり四国遍禮七十二番の札所なり

本尊 大日如来 長二尺五寸立像 弘法大師作 本堂東向

護摩堂 本堂に並ぶ 大師堂 本堂の南に隣る

鎮守権現社 大師堂の南にあり 鐘楼 大師堂の向東傍にあり 茶堂 鐘楼の北の傍にあり

二王門 北向門内両側櫻の並木あり 笠松 本坊の前にあり 圍凡廿余間 其形ち笠のごとし

西行笠掛櫻 鐘楼の前にあり 櫻の下に標の石を立て西行上人の哥を勒す

四国のへちしゆぎやうしける同行の都へかへりけるに

ゆきゆく人のこゝろをおもふにもはなれがたきは都なりけり

かの同行の人かへりなんとして此桜に笠をかけ置けるとぞ

笠はありその身はいかに成ぬらんあはれはかなき天が下かな　西行

按るに此所にも西行しばし寓居せられたるなるべし水茎が岡といへるは

此より二町計西にありて西行の菴の舊墟あり

山家集 ひとり見おきてかへりけるこそあはれなれいつか都へかへるべきなど申されければ

柴の庵のしばし都へかへらんと思はんだにもあはれなるべし　西行

寺記云

當寺ハ弘法大師善通寺落成の後建立し自ら七佛薬師の尊像を作て金堂に安置し給へり彫楹玉臺日星を引き繡甍我龍象林をなせり元杲仁海成尊等の名徳寓居し給ひ秘教称揚の道場名望高遠の勝區なり中世に至りて兵賊におかされ実に蔓草魑魅の棲となりて州の監察生駒氏の家臣二郎の何がしこのやぶれたるを見て感慨にたへず三間の佛宇を造営し俸田数頃を割て寄附しふたゝび香燭を継く遠く絶たるを継ぎける凡此境や金城北に峙ち沃野綺のごとくに布き五岳南に聳て碧巌鉾のごとくにつらなれり今境内

曼荼羅寺
傳云
大師善通寺と建て後入此寺に建つ
小金胎両部の曼荼羅と地に封じ此堂と立薬師七軀を置しつ故に曼荼羅寺と号ク
道遥院
それとなくへのゝゆゑハ
山ゆゑ〳〵わかぬをも
なほふる寺
護摩堂
三王門

千載集
世とすゝ〳〵ハ
むゝ〳〵
かゝ〳〵ハ
なゝめ
なゝん
時とゝ
そゝ
藤原定長朝臣
是ヨリ出釈迦寺ヘ
椎現社
本堂
大師堂
裏門
鐘楼
笠掛塔
手水
茶堂

二町四方林木鬱蔚して清幽都て塵寰と忘るべしもの

紫寺元杲仁海成尊の二名徳の遺跡しかい傳ふ彼此の寺と号奉る

寺延命院ちかいふ彼此異るべし小野の寺かり正行院しかるや今此寺

大師御建立の時より今の名のごとく小野の寺も此寺の名と取るも 以上雲石堂記

我拝師山出釋迦寺 曼荼羅寺の奥院しかるに三丁計奥にしかるに七十二番の霊場の前札所なり近世宗尊しかるに道あり此寺と建立ハしかる

本尊 釈迦牟尼佛 弘法大師の作秘佛なり

大師堂 本堂小並ぶ 茶堂 門内の左しかる 鐘楼 門内の右しかる 僧坊

石の札所と言ふ八十八丁上の絶頂しまあるを登るこの所より堂舎なり甚道嶮

岨なりて清人登る事と得ひ故に後世此所に寺と建てらるれ礼を納むべ

捨身ヶ嶽 山上の嶮しかる所とは大師しかるけるに時永法利生の御試しかるに寂ハ

世坂 峯に登る嶮路とり清人扶とあげ岩と取て登臨ハしかるべ

金三ノ九二

山水集 はんしんしの行道しかるハよれ大ゆうてまと立る

やまかり大師の御経かきてうづまれしかるる山の嶺

ひりうしかるのそしかるハ一丈ばかりかる檀つきて建らまそしかる夫

一日毎に登しかるせ甚しかるて行道しかるおいしかるる中

行しかるしかるめぐり行道とぞしかるやしかるに檀も二重につきとられ

しかる登る後の考き嶮大しかるかなしかるてしかるしかるけれど

めぐり多しかる事の契とかりしかるて巖しかる山に拝しかるひ時雲中に

出釈迦山 我拝師山のしかるうに大師此山に修行しかるのひ時雲中に

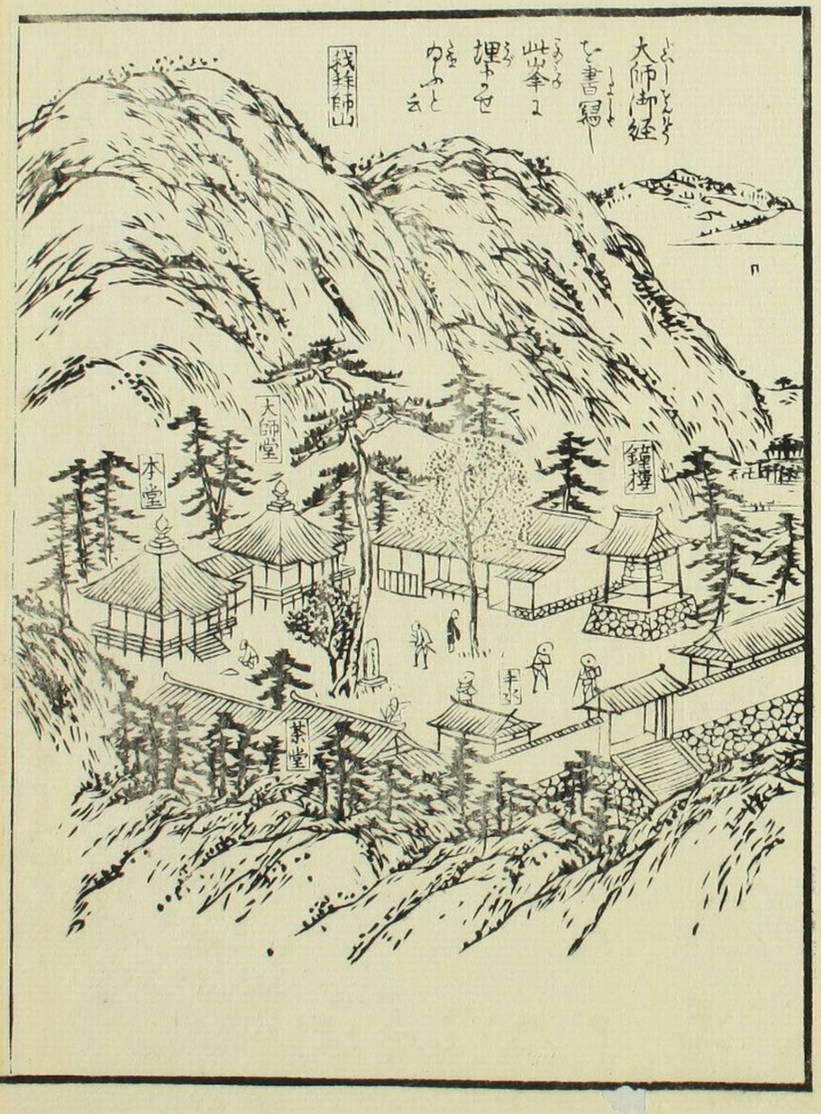
釈迦如来出現しかるる大師拝しかるゆ西行

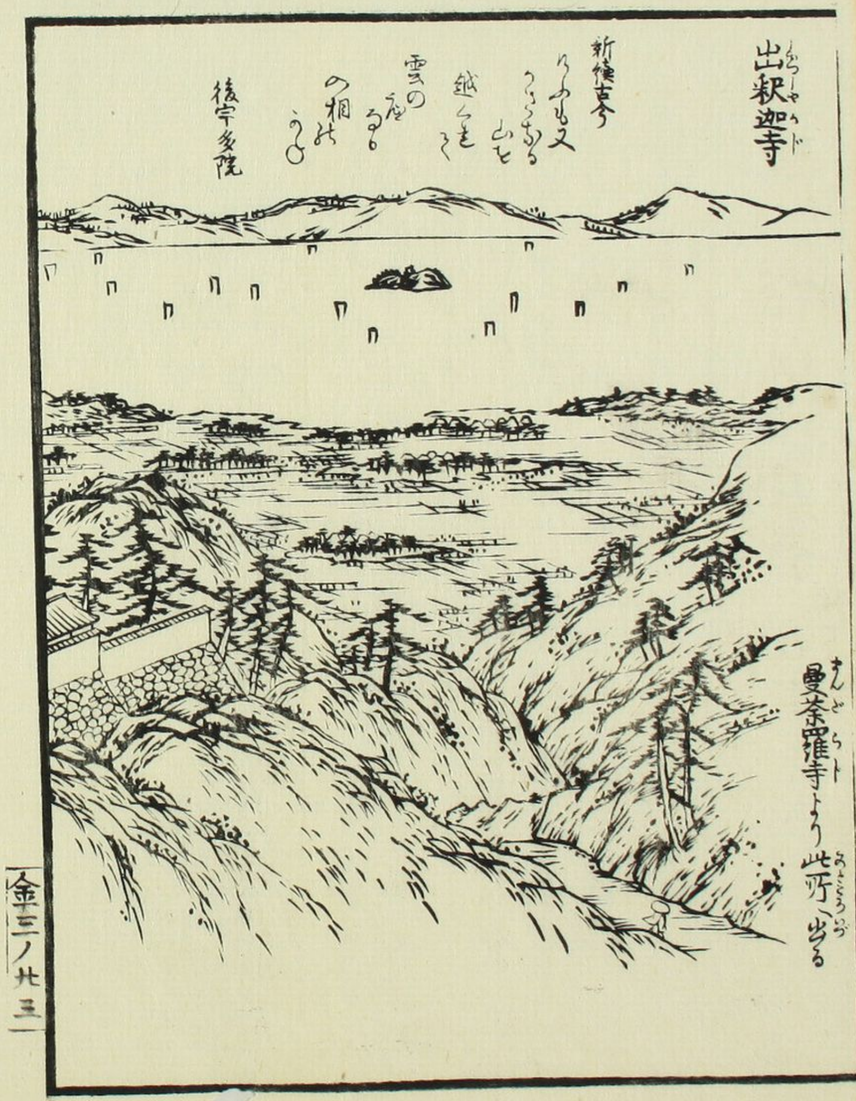
山水集 やしかるく夫ば上ハ大師の御師にあひまいらせ多おくしかる

しかる嶮しかるしかるいしかるしかるしかる山と中しかるその巳代人

大塔禅院趾 山上にあり今ハ甚趾のしかるり西行のころまでハ甚跡に礎石あるしかる

山水集 行道所とりかきてかきつけ登ると歳に海しかるれば師にひせ


大師御経
を書寫し
此山拿ゑ
埋ませ
ゆふと云
錢樓
大師堂
本堂
禁堂


出釈迦寺
新後拾
遺
越後
雲の
の相
後宇多院
曼荼羅寺より此所へ出る

[illegible]

[illegible]

護摩壇古趾　大師護摩僧修行の趾ぞ五穀の庚[illegible]

中山　我拜師山[illegible]ぶ五岳の基一ひら

水莖の岡　曼荼羅寺ようこ町[illegible]西行法師寓居の荒墟ふり今尚草庵あり　西行上人の像を安し拾遺の篇に委しく図を出し

山里に住世[illegible]ん　西行

山里と人来る世[illegible]ん　全

山里の秋は来[illegible]ぬ　全

教へ[illegible]　全

本朝遯史曰西行以在讃州寿度之菴而所詠之山里待厭世之友一篇渡難波而所詠之難波春夢蘆拓風度一篇後恵深歎美之云〻

水莖の岡

山町能因が弄の徳とりて雨とふ〻せ奥之と此聖はふる雨と晴せし妙はう〻廿余年人生涯の[illegible]弄端峯に枝ふ〻うべ

西行上人　五百年忌に

連翹や[illegible]の[illegible]日と[illegible]

胡及

山家集　れれ・圓・大師のゆくへ・ゆくえ・西国・海の・月・ゆくへ・ゆくえ・海の・雲・ゆくへ・ゆくえ・月・ゆくへ・ゆくえ・雲・ゆくへ・ゆくえ・海の月・ゆくへ・ゆくえ・水の・絶・ゆくへ・ゆくえ　西行

全

治承二年の秋ころ西国修行の時ゆくへ・ゆくえ・年・撰集抄

と造りめぐり其末壽永二年正月廿三日善通寺にて書終まうしぬ

此善通寺にくるハ久の杠乃庵といふ所ろんん

水茎の岡の湊　同所の桴すて・着し・海・ゆくへ・筆の海・ゆくへ

且世と水茎の岡の湊にて緒船の・ゆくへ・ゆくへ

萬葉集　天霧相日方吹羅之水茎之岡水門爾波立渡

廿天武　天武

夫木集　水茎の岡は湊乃波ゆくも筆の海てゆくへや立渡　西家

金三ノ北五

本朝通紀前廿五曰保延三年秋八月佐藤兵衛尉藤原憲清遁世

文下曰　憲清者武衛校尉康清之子藤秀卿九世孫也達弓馬之藝又讀書典有螢雪之勤且習管絃工和歌曾出奥州郷里到京師奉仕鳥羽法皇法皇以憲清任左兵衛尉爲北面之衛士每應制獻和歌恩遇日渥然憲清素有避世之心不屑恩寵一日憲清從弟佐藤憲康者携牛退公憲康語憲清曰余先祖秀郷征叛夷以朝廷之藩護其餘慶延至于我濟而朝恩捐厚然人間之榮耀不可久特彼山林之下豈無所係慕乎憲清感泣而相別明晨憲清爲候鳥羽院往扣憲康之門門外人聚戶内羣悲憲清問之家奴曰昨夜主人俄沒其母七十歳其妻十九歳憲清大驚彌催哀念乃將遁世而自謂不拜恩君遁世者於我不慊也直到鳥羽殿先陪御遊之席而後奏請出世間之望上皇不肯容憲清不得止帰家脫冠刀終出家

改名於圓位其後改名西行親近之家人亦出家相從號西住西行情不
淫富貴不阿貴家慈周遊天下無名山景境不歷見之地皆以詠和歌自
樂風花雪月皆以自詠遺興西常謂和歌者禪定之修行也我由和歌得
佛法西行將赴關東芒鞋竹杖到遠江國天龍灘寄身於武夫之舟舟中
人夏將湯翻呼曰僧等可自舟下西行之曰借舟之便者旅僧之常不退
一人怒以筆扣西行頭出血西行無少恨憤優然下舟而去西住見之泣
西行之曰余出塵固知如斯之事不虞之禍猶有大於此何爭乎汝宜帰
鄉西住不得止東西相別自是西行獨歩益縱行脚

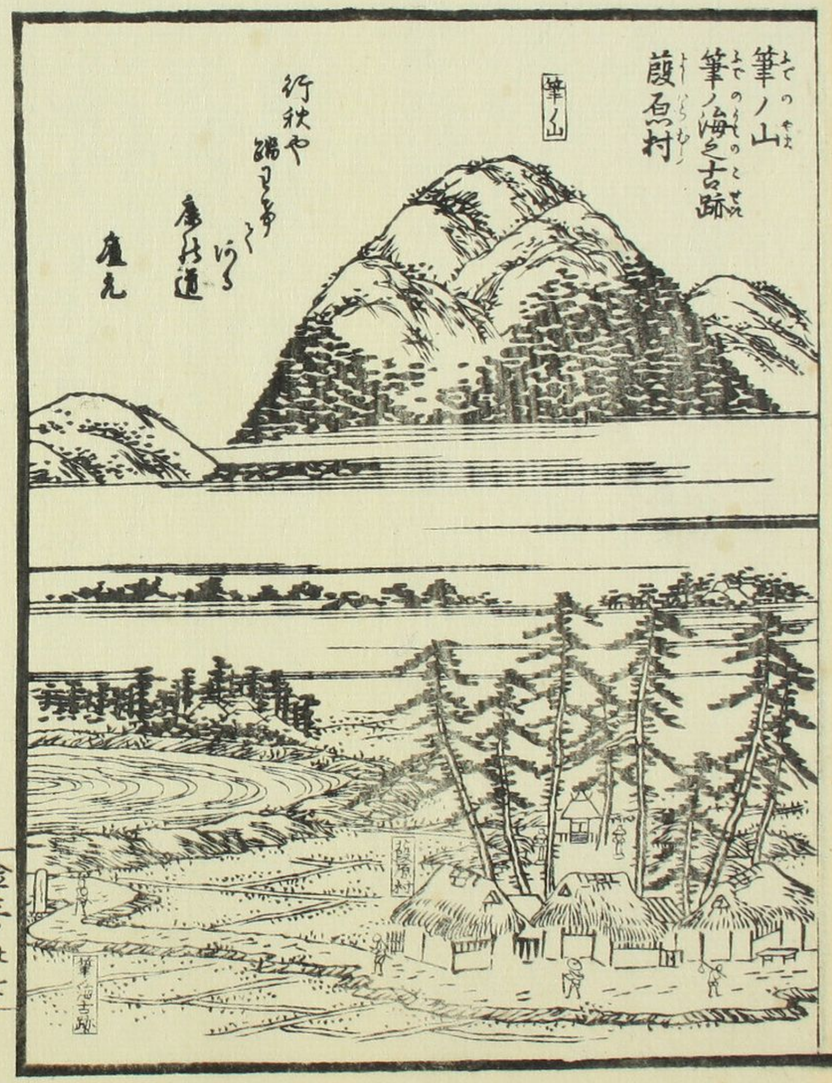
一書云西行聖人俗姓佐藤原氏從四位上鳥羽院の下北面左兵衛尉義清と
号ス又則清憲清とも書くあ然るを義と訓ずるの儀一同ならんバ
義訓くと訛謬くて終るべくこの職原大全上北面諸大夫四位五位任之是
今殿下北面侍之官也萃菴曰禁中籠の院参而為下北面候式者所
法名圓位千載集載此名大実坊と号し亦西行と名づく新古今集
○大職冠鎌足公——不比等——房前——魚名河辺左大臣正二位

藤成伊勢守僧正守 従四位下 魚名五男
豐澤備前守 従四位上
村雄左衛門尉 従五位上
秀郷俵藤太 従四位上

千常従五位上 将軍
文脩 書公脩 将軍 内舎人
文行左衛門尉 従五位上
公光 書相模守 右衛門尉 従五位下

公清宮内 左衛門尉
李清左衛門 従五位下
康清左兵衛尉
憲清下北面 西行

七佛藥師堂 葭原村於婆の池の傍にあり 草庵 堂あり観世音弘法大師おを安置し
本尊 瑠璃光佛 弘法大師の作
古驗之松 草庵の傍にあり大師の植の所にて霊験あり松の下標石を建



於婆ノ池　正字未詳　七佛藥師の堂の後一面の大池にして恰も湖水のごゝ　国中大池の其一なり

鳥坂人面石　樋戸野村鳥坂の山中にあり高凡二丈余巨巖悪相の人面の如し

花立碑　鳥坂の里端を往還の傍にあり碑銘累累拾遺の篇に委く著べ

頼政箭止ノ松　厝田村にあり甚事実詳らかなべ

樋戸野ノ池　樋戸野村にあり大池なり天霧山前にあり

釵五山千手院弥谷寺　大見村にあり四国霊場第七十二番の札所なり

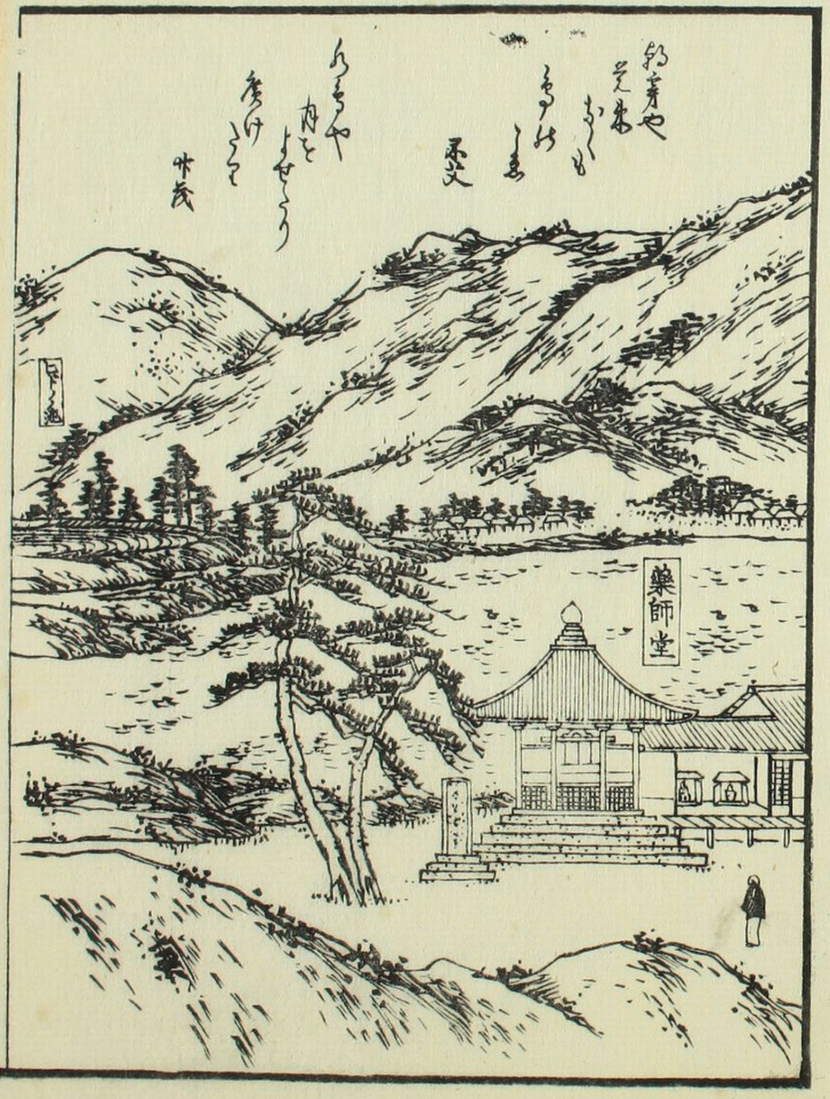
本尊　千手観世音　長三尺五寸立像弘法大師の作大悲圏の左に弥陀と数此尊像のごとく千手院と号べ

脇士　不動明王　毘沙門天　右同作なり

護摩岩窟　崖頭に穿ちて護摩檀の洞あり石壇の上に不動弥勒弥陀の尊像を安置べ

道範阿闍梨々像　右洞の内の傍にあり昔範師此国に配流の時当寺の住持の所望にして行法肝要を授けられしに彼書の奥書にあれば其住持かゝの此傳をつたへおけるゝやとそ

金三ノ廿八



金三ノ九

水聞特巖窟　奥の院　弘法大師の御作の三尊の岩窟なり　内の四面の岩面に五佛を彫り　藏地藏ホと彫刻し又大師の御両親を擬らへ奉りて弥陀弥勒の石像と安し　誠人をして御両親と拜し

拜堂　南向なり　造りなり

三尊弥陀佛　本堂の左の盤石ホ弥陀三尊六字の名号　九行大師の御筆なり

藏上權現社　獲摩山崖の左の山上にあり　長凡八丈　大師の作則ち當山の鎮守

加持水瀧　獲摩堂の右の方にあり　水祭納骨所　甚だ瀧の下にあり

辨財天祠　瀧の上の方にあり　降剱所　瀧の左の上にあり　五柄の剱字降りて右跡あり

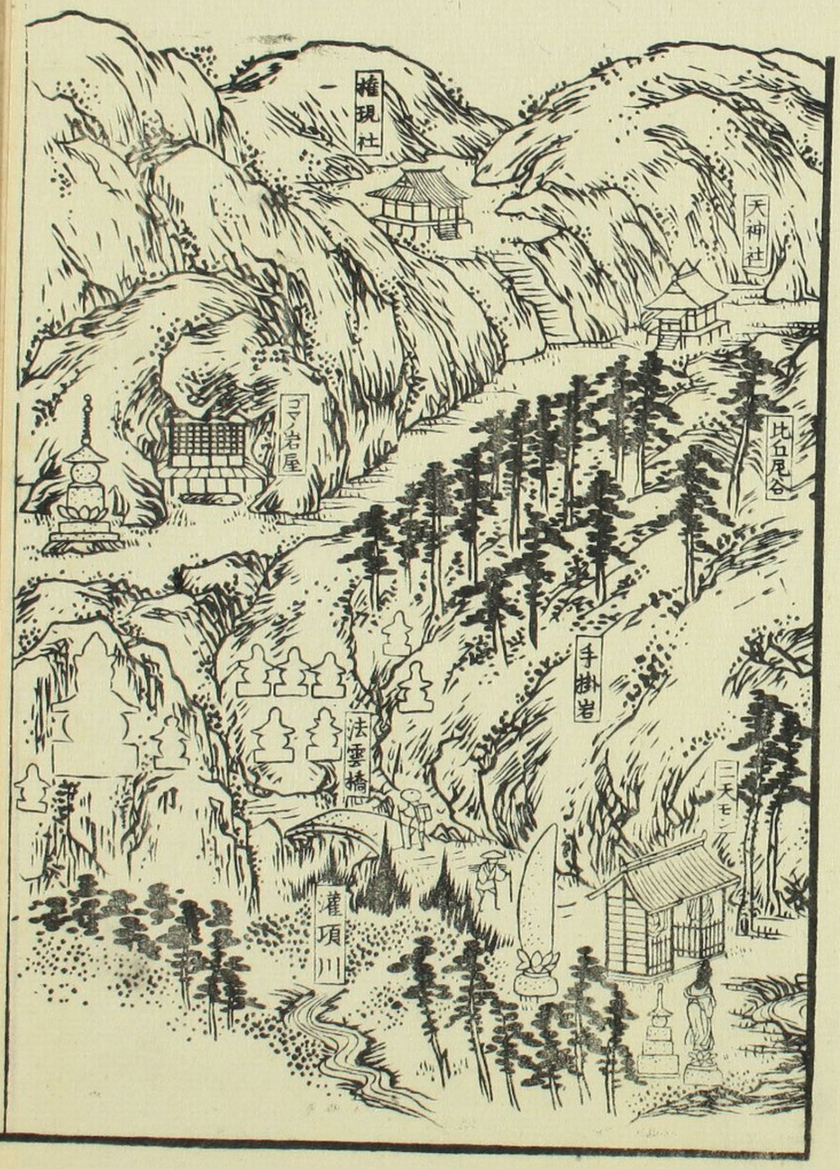
六本杉　瀧の下にあり　天神社　權現社の下にあり　鐘樓　獲摩崖の下の方に有

十王堂　鐘樓の向ふにあり　觀音堂　西国三十三所の尊像を安し十王堂に

中院　觀音堂にて弥陀釈迦の二佛を安し　洞地藏尊　洞藥師佛　方丈の傍に有

茶堂　方丈の門前にあり　法雲橋　灌頂川を渡し　手掛岩　法雲橋の傍にあり

二天門　持国天　多門天を安し　本堂より二十丁下有　二王門　金剛神の西尊を安し　二天門の向かへあり



金三ノ三十一

本堂
山崎志州祖母石塔
山崎伐家石塔
大宮四長石門塔
香川家代々之墓
東院
東聞持窟
岩窟
西院旧趾
洞地蔵
洞薬師
方丈
水手
茶堂
獨鈷坊旧趾

降魔所
三尊弥陀
弁天祠
納音所
阿弥陀水瀧
六本杉
水谷
一正石塔
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
文經觀
中院
三十三所観音
十王堂
鐘撞
大日堂
金三ノ九一

比丘尼谷 東院之旧趾 権現の社の東にあり 瓶岩 二王門の上の山腹にあり其形似ることを以て号く

水谷 二天門の前の流の水源をいふ 穴薬師堂 川の向ひにあり

生駒庚石塔 名号石の嵯峨にあり 籠所 石塔一対 納経穴 本堂の右の方にあり

山崎俊家石塔 山崎志州祖母石塔 大宮四良右衛門石塔 共に本堂の西にあり

香川家代々之墓西院之舊趾 右小同ト 獨鈷坊古跡 茶堂の下の方にあり

抑當山人皇四十五代聖武天皇の勅願にて基菩薩の開基にして弥陀釈迦乃二佛を安置し蓮華山八國寺と号し蓋絶頂に登れば州を一望するなり故に其後弘法大師此山に登臨し給ひ永聞持の法を修し給ひしより虚空より利剣五柄降り金色の光赫々として藏王権現と現じ大師に告げ給ひ此山八葉乃如来説法の地観在菩薩埵度生の砌なり菩薩願ハく八千手大悲の尊像を造り伽藍再興して秘密の法門を開き普く無縁の衆生を救ひ給ひ我も又衆生とともに

鎮守護せんと願ひ給ひしより大師十一面千手大悲の尊像を造立し新に精舎を営み給ひ且蔵王権現の形像を彫刻し鎮守として給ひ突鉞五柄降るを以て鉞五山と号し又鉞の御山と云ふ五峰の音同じくして大師窟と穿り佛像を彫刻し或巌石に阿字を鐫し五輪塔弥陀三尊大日等を刻せり其余名号鉞形宝塔形などのごとく山に有ること怪岩奇石ごとく五輪佛躰にて目の接る物足の趾ごとく高峯深谷に至るまで不思議の神跡にして言ふべからず故に佛谷佛山ともいふ凡當山嶮崖崖嵬ごとく幽迥にして隣なし彼霞と眼に風に駕して人にすぐれ唯一山に至らんや雲霧常に起り異木異草盤々岩端泉流清精神凄然として嗜欲更に消し将に人々八霊寶若干あり数回兵乱の為に失なはる物多くは就中一奇の異寶は大師所持の紫銅の鈴あり圓一四天王乃

像を彫其間に八幡脇拝と刻む拝とるの唱歎せぶしい事なり尚此余是と
畧に宏伽監僧坊あも兵火に焼失し且享保五年の春火災かゝりて焼亡
に今東院西院もど其間跡のみ蓋傳云此峯に登臨する時八州一望
とるゞ故ゆ八國寺と号しなる何老の時より弥谷と書あゝはせうこれい
全く弥はやの音にして八の字を加へ國八谷の音同ゞさゆへあるいは或
云此説後世附會の説あゝんゝ弥谷山の俗号にて二峯の峯東北西
に峙ち溪谷弥に尋もる故に弥谷とよぶ弥生弥猛の類いるべし
天霧山　弥谷山の艮に連る高山あり香川信景の擯竜る古城の跡あり樵に出九乃
臥龍の回跡まあり委しく拾遺の条に著す
本朝南海治乱記云香川氏其祖鎌倉権五郎景政より出て下総國の姓氏也
世〻五郎を以て称し景とあつて名とし細川頼之より西讃岐の地を湯つて
尋度郡天霧山を要城〻尋度津に居住せりと又尋度之郡豊田郡の

主香川氏なり居城尋度津雨霧山也と云
同書此雨霧山城と云ハ険阻の高山にして大手の路ハ馬も上れバ大身乳
山城あり上の分内も廣くして大兵をも納べし水ハ澤山にして早魃と
も乏しかるべ険要の名城なりと云
天正二年冬香川兵部大輔元景織田信長に服従し幕下に候せ
んと乞ふ信長悦喜斜なゝ使者の演説と同給ひ食雁を
給し明日報答あつて香川元景に字を賜ふて信景と稱し
天正七年香川信景土佐の長曾我部元親と和不調ひ元親の次男五
郎次郎を嫡孫と呼むと養子と家の女子に妻ハせ婚儀と調ひ本城と
渡さる此時とゞに尋度津と野豊田に那珂郡と加て四郡の主なり其
所柄も豊饒にして衰乱の世といへども自余の兵将に越さりしと云

香川長曽我部和親

天正七年の春天霧
の城主香川信景
土佐の長曽我部と
和平とは香川方
の質〳〵て香川山
城守河田十良兵衛
同孫太郎二野菊
右ゑ門四人の家老
と二人づゝ出列番
代〳〵結ひ信景も
岡豊の府へ出仕ひつ
て太刀馬綿

金三ノ仇四

細ゝのまゝ進
ぜゝる元親も
別て用ひら
食も正式の膳
部に乱れ舞ま
ひつ五日
滞留
あつゝ
飯国の
沢國分
茶屋
と立て
送り酒
迄ひつ
ぞ

天正十二年羽柴秀吉四國征伐ありて香川信景敵となり養子五良次郎親政の縁に随ひ雨霧山の城を去て土佐國に引取るべ

天正十五年八月生駒雅楽頭正親讃岐國を賜る其頃生駒讃岐守一正召出さる侍士の内さこ野菊右衛門河田七良兵衛の兩人香川信景の家老にして名高き勇士なり各二千石を下され抱らるゝ兩士共小男子數多ありて是に分ちたるべ

又天正十四年豊後の大友援兵の時長曾我部信親十河存保と共に戰死と致し香川氏部少輔ありて是雨霧の城主信景に為べく北條の香川ありて

勝間石塔　勝間村の田圃の中にあり高凡そ丈弐十三重に積て土俗云弘法大師の作と

本山寶持院長福寺　本山の庄にあり故に本山寺とも呼び靈場七十番の札所

本尊　馬頭觀世音　長二尺五寸　弘法大師の作

脇士　阿弥陀如来　藥師瑠璃光如来　右同作

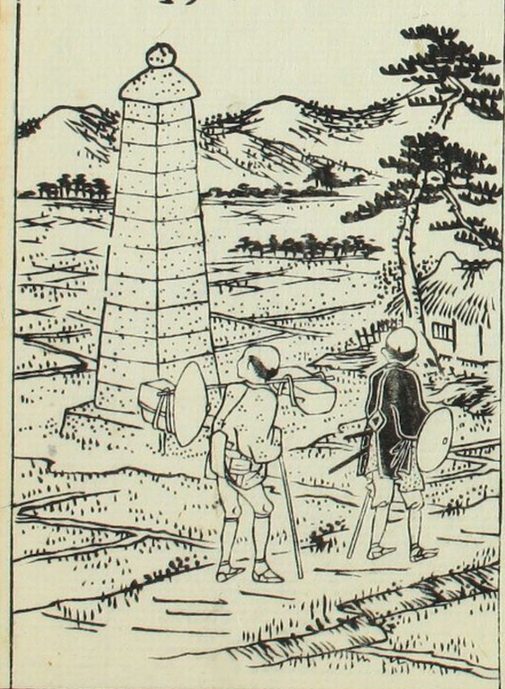
御影堂　弘法大師　本堂の左の向にあり　茶堂　大師堂並に接待所なり

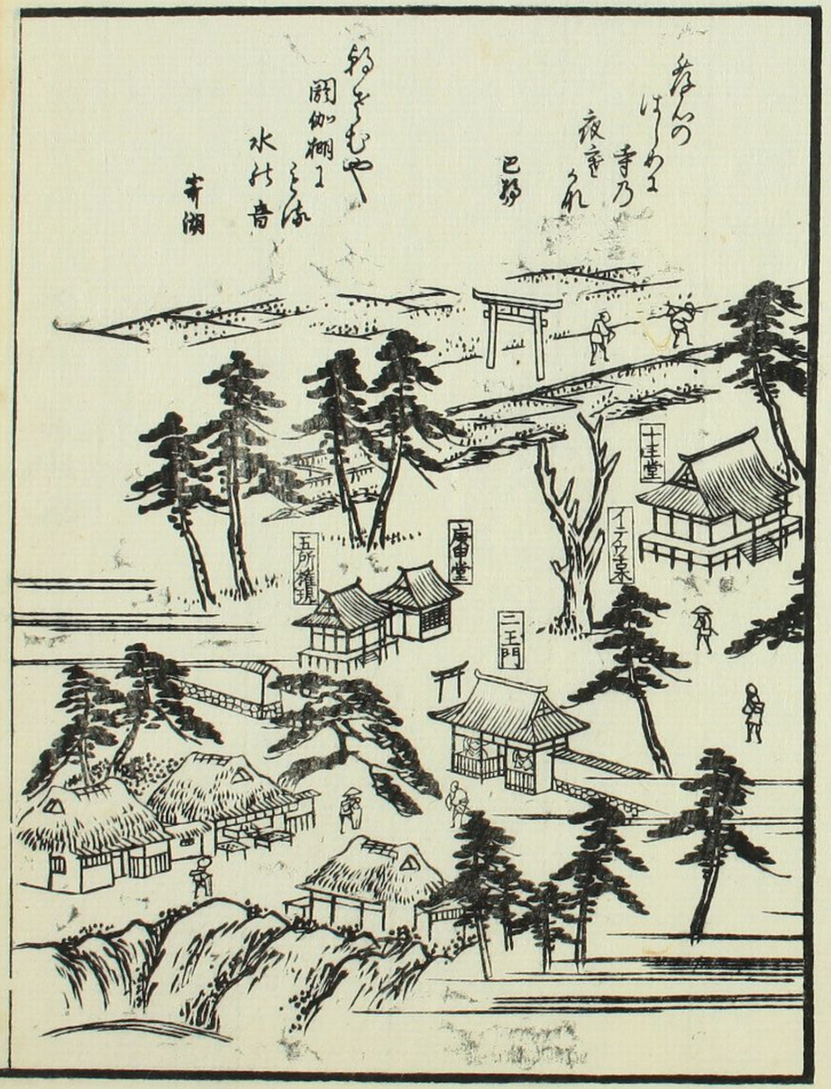
大塔の跡　本堂の右の傍に小堂を建る　十王堂　大師堂に對し十王并に三所の觀音三面大黒尓を安し

鐘楼　大師堂に隣る　庚申堂　青面金剛童子を安し　五所権現社　庚申堂に並ぶ

二王門　金剛力士の像を安し　銀杏枯木　十王堂の傍に有て大木なれども今枯て幹のみ存し里俗是を祈願して其驗有

無垢淨光陀羅尼經曰
造石塔功德有七種
一千萬歲生天宮
二得長命三得那羅延力
四得千万歲内國王位
五得遠離生死身金剛不壞身
六得三明六通果
七得四十九重寶殿





金三ノ卅六

當寺八大同年間弘法大師建立の伽藍にして往古八七堂魏々たりしかども
天正の兵火にかゝり悉く焼失し然れども本堂八恙なく存ずるが故に三佛
今に安躰なり境内に八九枝の大樹枝條枝蹠にして幾世とも経るもしれず
閑寂にして古ひ本堂の後に古さ五輪許妻にて事實詳ならざれども
通年の古物なるべし前に長流の川あり二王門をゝ八観音寺に到る街道
本堂左の脇なる門八弥谷への通路にして蓋此地と本山の庄にして此より海辺へ
七里の岬にして其山の本なるが故に呂にして則ち海岸の端を箱の岬といふ

高良神社　本山寺の左に並ぶ當村の生土神なり
祭神武内大臣なるべし

本山寺之古楓　本山寺より二丁計東由圓の中にあり本山寺建立の頃造りし柱なるべしと里人の説區々なれども千歳の古物なりといふべし

七寶山普門院神照寺　植田村にあり俗に植田の天神といふ本堂南向草庵東向

本尊　観世音菩薩　天神社　本堂に並ぶ　菅公を祭る　辨財天祠　天神の社に並ぶ

天神之松　神照寺の境内に枝條を偃れ俗に植田の松ともいふ

樹の高さ五丈余幹の大さ壹丈五尺廻東の枝廿五間余西の枝十五間
南北之枝二十三間余年々繁茂して枝毎に数本の束枝を立て是を
支古実や泰山の松樹始皇の雨を禦ぎし形勢も想像るべの大木
なり往返の旅人なりに来つて賞美せざるなし

本山寺之古楓

土中より出ること凡五尺余首を
拘と納でも鑿あり木八正く
擇るべし本山寺建立の殘木
なりし言傳へまでも何の故と
言こと詳らかなる都會の地にひかるもせず
彼長柄の橋柱のごとく言りてもやはり一奇の希有なり

植田天神之松

金三ノ卅八

琴弾八幡宮　観音寺の住僧の霊場　第六十八番札所なり　社僧　観音寺　安く次に記す

本社　應神天皇　大寶二年豊前国宇佐より御遷座

高良社　武内大臣本社の右に並ぶ　住吉社　住吉の神本社の左に列る

若宮権現社　住吉の社の南にあり　大師堂　弘法大師上之菴　大師堂の傍に安し

鐘楼　本社の階下にあり　九重塔　石にて造る鐘楼の傍にあり　中之菴　山の半腹にあり　休所也

瀧ノ宮　風ノ宮　中之菴の向に並ぶ　天神社　中之菴の下にあり　鹿嶋神社　梵の岨にあり

一之鳥居　藤の坂口にあり　二之鳥居　山の半腹にあり

宿居　一の鳥居の北の傍の芝原にて例祭八月十五日神輿此方に渡御の式あり　毎年行宮といふむ當日濱辺にもて競馬の例式あり

十王堂　宿居の下ノ菴　十五堂のうちにあり　梅暇の濱　此所の濱辺とて

當社八皇四十二代文武天皇の御宇大寶二年豊前国宇佐の宮より八幡大神宮に移らせ給へり其時二ケ日晝夜くもり西方に天鳴動し黒

雲おかひ日月の光を隠し國民あやまり如何なる変を生ずるかと行く西方の空中より白雲虹のごとく繞り當山にかゝれり終に此山の藤梅暇に海濱に一艘の怪舟あり中に琴の音あるて其音美妙にして嶺松に通ふその須此山に止住の上人あり名を日澄といひ此上人船に乗りて神人にて在れば何度にも此にいたり給へと同答て曰我は是八幡大菩薩なり帝都に近づき擁護せんと屬て宇佐より出此地に来るなり故に遊びて上人又曰疑惑の凡夫に異端を見ざれば信じがたし希く遇遂の人のために霊異を示し給へと然るに其夜忽ち海水十有余町の程緑竹の茂藪となり又沙濱十歩余松樹の林となるまろ緒氏此奇怪を感嘆せざるなし夏に上人郡郷に觸て十二三歳の童児ホの欲深きなるの数百人を集めこの山の竹乃谷より御船を嶺上に引あげ齋祀しく琴弾別

宮に歸し奉る御琴幷び御船今に殿内に崇め奉る尚奇怪の靈異數回の事多しとゝ則ち此船、神功皇后異國征伐の時乘給ひし艨艟多しと言傳ふ蓋八幡の御支、朝家の御宗廟にいひ別して異國降伏の靈神なる故に當宮西海に臨み給ふ其余武内大臣住吉明神若宮權現の祠とゝめ七十五神の伴社山中に充滿し中にも青丹明神と以て上首とし此山岩壺崎嶇として二方滄海渺々たる山嶽に神秀異仙の靈宅なる所いとゝ半腹に華表と立禁に石の鳥居あり近世勅額を給ふ縁起に椎中納言實秋卿の筆にして足利將軍代神のゝ

什寶

○御神琴　神功皇后御遺器大宮に年自豐前國宇佐宮御遷座之時船中御愛撫之靈琴今猶存當社第一之靈宝最海内一品也

○御船之靈材二箇　同時御着岸之御乘船殘木也

右御船往昔より寶殿に納めたてまつる所寛保廿一年丙辰春二月八日の燒災火に罹て燒失し給ふ其材二箇今に燒て給ふ

琴彈八幡に所大菩薩御垂跡御縁起云今此御乘船是神功皇后異國征代之時自然出現之兵船也云

又曰出現一艘船是非人倫之造非化人作竜宮出現之兵船也即不論水陸虚空神通宝船也

○古鏡　一面　神代遺品　神功皇后御愛物

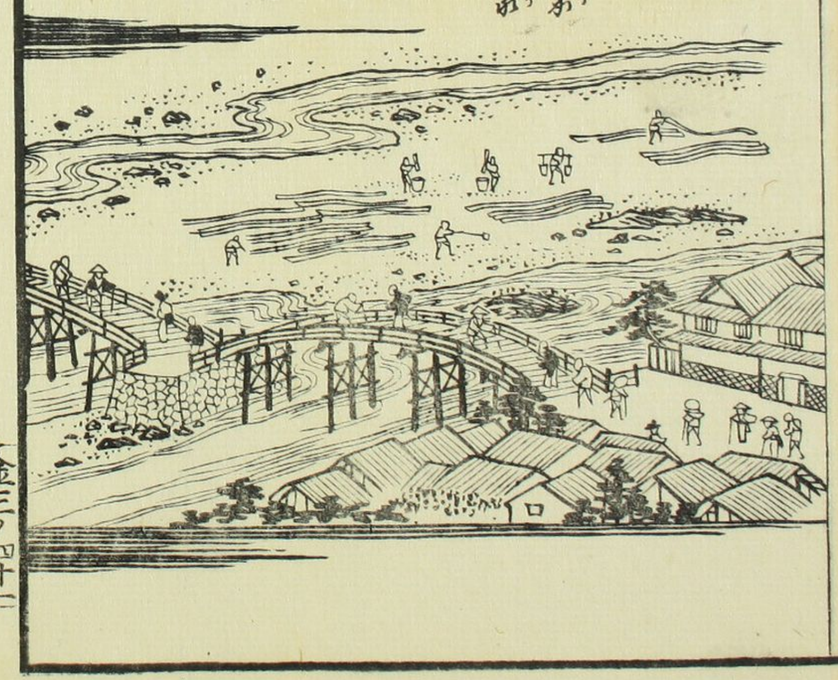
右の寶鏡上古宮殿の裡にて失ふ然るに數年を歴て二十三世住僧正高源兼元四年庚午に池中に湧き上代の國と以て是を合ふに遠ハ又重量も同じくこれに依て神鏡なることを知る最威驗ありと故に其池を号して後の池と云今末院の地内にあり院号を鏡照院と云

○三所御劔　二振　三条宗近作　源義経公寄附

○源頼義公御願書一通　○源義経公御願書一通

橋下の河原ハ
在家より其ま
て網市と呼く
さいた

橋人の
秋は
赤さや
ひらし
布
楚日



深川　琴弾山の麓より
川上すてハ鹿熊川こゝ
二架橋　深川ハ架ハ
二橋つゞけて架るゆへ
号ー　こゝ

橋詰ハ観音寺の町すて高家二百
建つゞけて賑ハー町家凡四十軒在家
二十箇村あり

十八丗　禁河遊魚

禁川青紫　ゆ
ゝれもたて
魚のうゝん

仝　千家長亭

ひましやうとあつて
人の納
ゝきのやれ
里

放生川 藤の東と流れ深川に會し

琵琶之首 放生川の流れ橋の上の方に岩いくつ所にあり琵琶に似たり

宿居

梅腋の濱 宿居の辺の濱とも

一之鳥居

鹿島社

由緑未詳

金三ノ四十二

十景 梅腋凍月

梅の花 月の内の 月の風 れもの 梅や

宿居群梅

山もと桜 藤ふじみ

宿居

一ノ鳥居

手水

梅腋濱

○長刀一振　刃長二尺五寸柄長五尺六寸
天平勝宝元年十一月廿九日諫議太夫石川年足奉納

○地蔵菩薩画像一幅　香川中務信景奉納

○菅家御筆　五通　○嚴有院殿御條目　一通

○二千佛名経　足利二代将軍義備公御筆

○大般若経　壹部六百巻　後鳥羽院勅筆

料紙長二尺五寸　文字行長八分

観應二年辛卯二月廿四日琴弾神宝目録記之　細川頼之寄附

○法華経一部八巻　並開結二経　大江中納言匡房卿御自筆奉納

開経八無量義経　結経　普賢経　五色料紙用之

○琴弾山繪図　一幅　土佐将監光信筆

○七寶山縁起　征夷大将軍源朝臣（花押）
右義持卿ヨリ

金三ノ四三

奥書云應永廿三之暦仲春下澣染疎毫訖
　　権中納言藤原實躰

又云　此一巻者古来當山所傳縁起也今令按察使
前中納言新写且手書外題以奉納八幡宮神殿
　　旨延享戊辰夏六月　（花押）

琴弾の山松風を養さめて岩ほ高くも人ぞ聞ける　春の夜

勝地探奇古祇林　松風颯々似調琴
茫々滄海波如雪　疑入蓬瀛隔水深　費晴湖

過ぎぬるの宝とまぐ改めて後代の人の偏へ
　　発志日詠

毫揉帝可貴南羅志都々玉琴濃志良辨曾免
計理数迺宝遠　小林某

夫此山ハ二方ひゝけて海上を見るこゝ前ハ有明の濱と呼て東西數町のうつゝ二面の真砂地にて山の裾にいゝくゝぐれバ一株の松ゞにも〳〵恰も畳と敷るゝ如さの海辺ゝ山路も海に對ゆゑ平生風烈〳〵して松ちのづゝ高くのびゝ地に偃て這ゞ如く踊るゞゝ其形勢異るゝざるハなし原来かゝる松のゝうて小紫芽萱の類ひも生せゞ洗ふゞ如き砂山もゝバ其美景ゝるゝ言に絶ゝ扨又向ふに遥の灘伊吹大島とくゝも吉備の山〳〵中國路九州おゝも遠見雄手の嶺川の山峰〳〵遥〳〵雌手ハ稲積秩父峠箱の岬江浦山澳と行船湊に入舟破に引網浦の釣船衝鷗の飛ゝもゝ皆此山の風景にて殊更名ゝ有明の月の夜ゝゝの眺望ハ須磨も明石も中〳〵及ばゞゝゝぞ想像まゝ

象の鼻　社頭の東北にうゝゝ岩のかゝゝち象の鼻のゞゝ故に号く此所より海上を眺望こゝ風景言絶ゝ

竹溪　宿屋の西の山方ゝり御舟と上一古跡ゝゝ

閑答石　宿屋の西の山のすゝゝにうの日登上人八幡大菩薩と問答ゝゝ跡ゝゝ

二本松　有明浦の南にうの古松ゝるゝ　北谷　社頭の北の谷間とゝ

七寶山觀音寺　琴彈山の半腹にうの則神宮寺社僧ゝ四國遍禮第十平九番の札所ゝ

本尊　正觀世音菩薩　座像の長二尺五寸弘法大師作

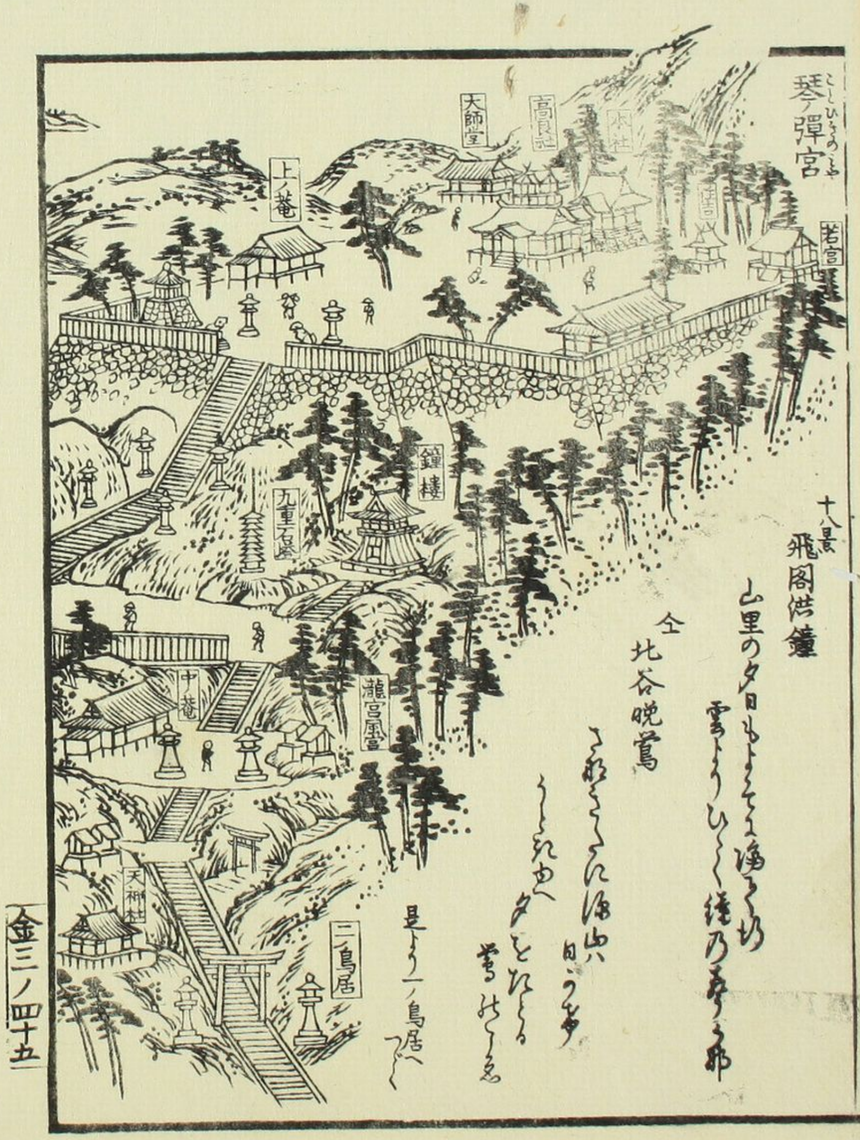
愛染堂　本堂の向ふにうの愛染明王　中金堂ゝゝ　大師堂　弘法大師を安ゝ愛染堂ゝ石にあり

西金堂　正面磴道の上にうの大六　大威德明王を安ゝ

宝塔鷲師　藥師堂の左にうの　藥師如来を安ゝ　服士四天王　共に弘法大師の作

弥勒堂　正面弥勒菩薩を安ゝ右に毘沙門天王左に毘其日登上人の像を置て　遍照塔　宝塔の四趾に並ゝ小堂ゝゝ柱の左右に日天月天の彫物を掲ぐ

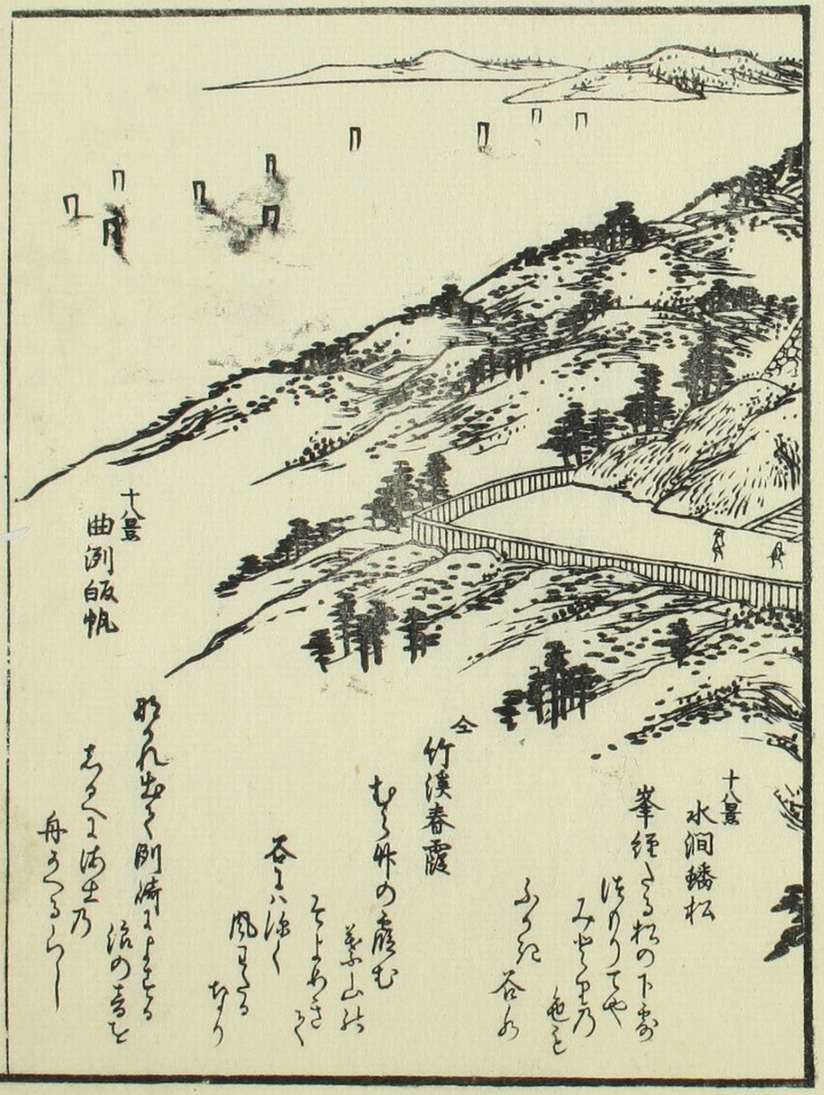
太子堂　弥勒堂の右にうの聖德太子を安ゝ　地藏菩薩訶梨帝母を安ゝ　龍堂　中金堂太子堂の間にあり



十八景
飛岡供鐘
山里の夕日もとゝ海とゝ
雲とゝひゝく鐘乃音ゝ

仝
北谷晩鶯
ゝゝゝゝゝゝ海ゝ
日ゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
是ゝゝ一ノ鳥居へ

金三ノ四十五



十八景
曲渕飯帆
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

仝
竹渓春霞
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

十八景
水涸蟠松
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

五所権現社　青丹明神社　孫勤堂の後山にあり　青丹の社六十五神の俗社の上首なり

茶堂　孫勤堂の下にあり　鐘楼　茶堂の左に　五智如来石像　愛染堂の傍にあり

二王門　南面金剛神の両像を安ず　天神社　二王門の内西の傍にあり　稲荷祠　同東の傍にあり

本坊方丈客殿庫裏寮　蔵　食廩　観音堂の向ひに列せり　其余東院六坊　惣門の内に連る　且金毘羅の社　生眼の八幡宮　天満宮

此坊中の境内にあり

抑當寺八宗五十二代　平城天皇の御宇大同元年丙戌　弘法大師唐土より帰朝の後琴弾宮に請で賽の法施を給ひしに　大菩薩の御託宣に　貞観の此地に寺院を營み神宮寺と常に法味を八幡に進め奉るべしと　縁り給ひて則ち大師手づから観音の尊像ならびに太子の彫像光仏四天王をば　作り給ひ緒堂を建立し安置したまふ　石塔四十九基を起立し

金三ノ四十六

蓋都率の四十九重を表し給へるなり　又大師七種の陀羅尼を此山に納め國家の鎮押し給ふ故に七寶山と称し　山八葉にかたどり且九所の秘宮にして金剛界胎蔵界に表したるぞ

寺中七坊　鏡照院　和合院　不動院　慈眼院　惣持院　寂静院　泉蔵院　右六坊八二王門より惣門までの間に両側に列せり　此二坊八伊吹島にあり

則當寺八八幡宮守護の社僧にして無本寺の寺に傳ふる所の御證文なり

甚文曰

寛文七丁未年閏二月十八日　御判なり

元

後法國豊田郡琴引八幡社僧観音寺と雲辺寺と地蔵院

如来院相縁双方共合会執行文観音寺に琴引権現

社僧に成古院文安給状見れば近代迄地蔵院法流なり

俗也安修相同に維然社僧に本寺と有べきなれば

後観音寺止滅罷後社僧に役俗可出家但正月礼後

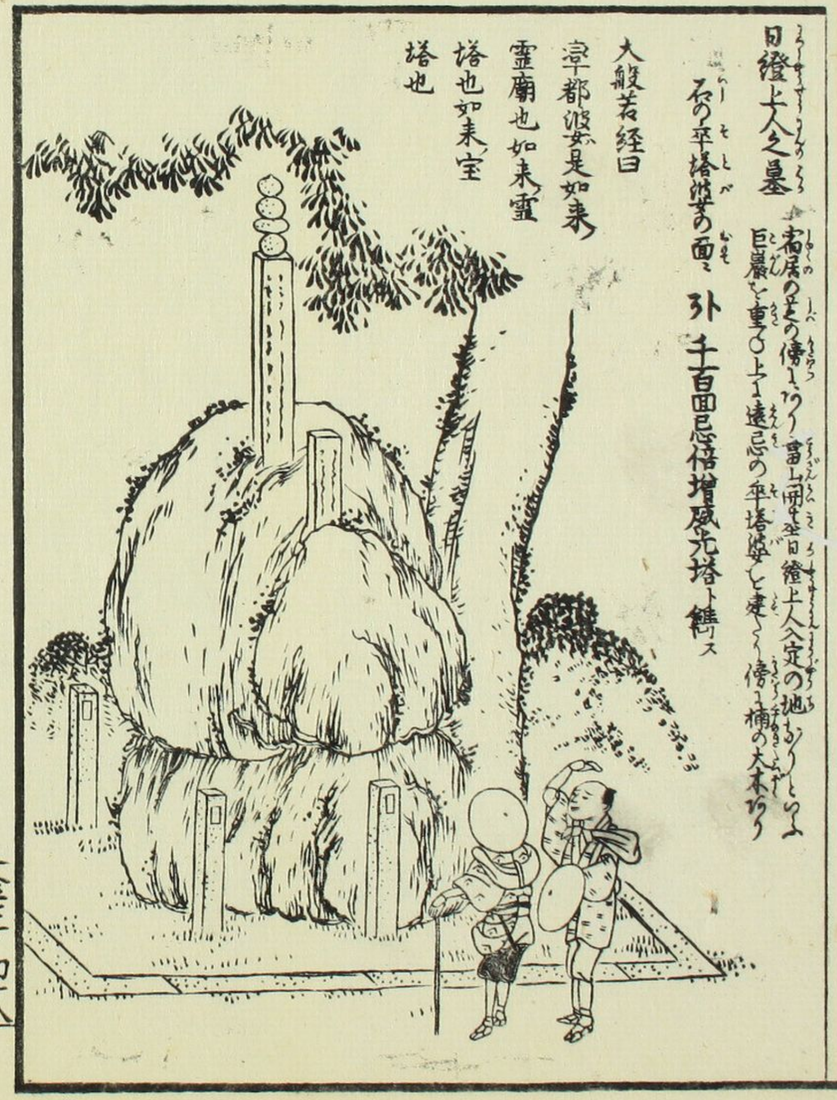
俗志ほ如在来に和尚者也乃後法印の件

観音寺
遍照塔
中金堂
五所ヨ堤
太子堂
ミロク堂
ヒヤ堂
ニュロウ
二王門
天シン
ハヤシ石
金三ノ四十七

西金堂
アイセン堂
大師堂
方丈
客殿
五智堂
天神社
風のよに
ちるもみぢ
かな
わすれ枝乃
うとまもきこ
琴引山

日燈上人之墓　書居の北の傍らにあり　富士開基日燈上人入定の地なりと云ふ
巨巖を重ね上て遠忌の卒塔婆と建て傍らに楠の大木あり
石の卒塔婆の面に　外　千百回忌倍増風光塔と録す

大般若経曰
亭都婆是如来
霊廟也如来霊
塔也如来宝
塔也



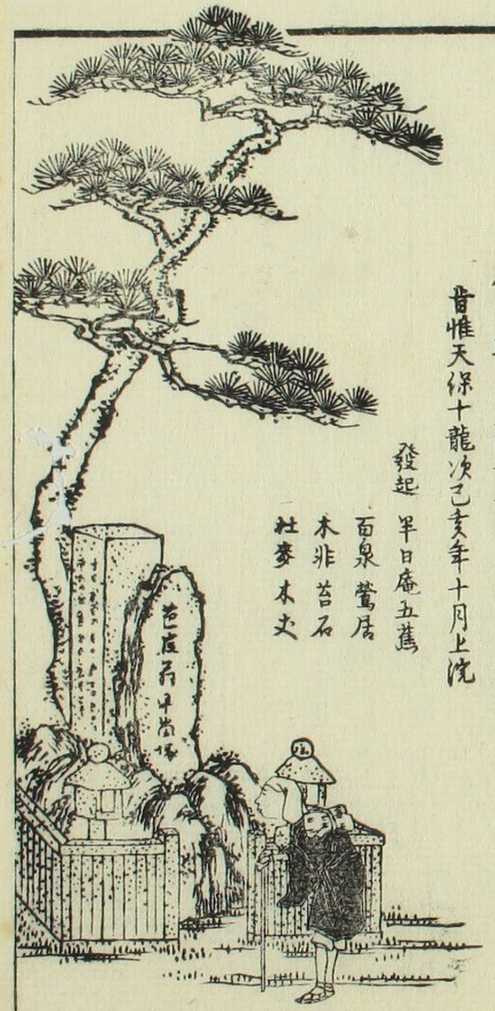
金三ノ四十八

芭蕉翁早苗塚　上人の塚の前の傍らにあり　近頃古碑の後辺に俳友新碑を建添且石垣燈籠等を造る

古碑之面　芭蕉翁早苗塚

新碑之面　早苗とりてやそうしきの人揺　芭蕉

勢曰
先人帯河文魚也者理翁真跡之短冊立此碑焉
歴年既久而将頽轉仍於社友再修之
昔惟天保十龍次己亥年十月上浣
發起　半日庵五蕉
百泉鶯居
木非　苔石
杜麥　木丈



芭蕉翁繪詞傳曰

志のぶもぢ摺の石を尋て志のぶの里にわけ入ゆ山陰に小石あるハ
土に埋れてあり里の童のおしへけるハ此山の上に侍りしを
往来の人の麦草をあらして此石を試るを憎みて此谷に落しけれバ
石の面下さまにふしたりと云

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

此ことバしるしハ芭蕉翁懐旧の時しのぶの里にての吟なるよし明之
其真蹟乃短冊をとりて此にうつして早苗塚と称しまた石碑に建る

芭蕉翁ハ伊賀国上野の藩士なり其先祖ハ平家の侍弥平兵衛宗清の末孫にして父を松尾与左衛門とて上野の赤坂に住せり幼名を金作と号し後半七郎宗房とよび更て忠右衛門といふ正保の始に生れ明暦乃頃出て藤堂家に仕ふ主馬の業のいとまにハ風月の道を好み和歌および俳諧をもて遊びて時の宗匠北村季吟をもて師とし寛文十二年の秋仕へを

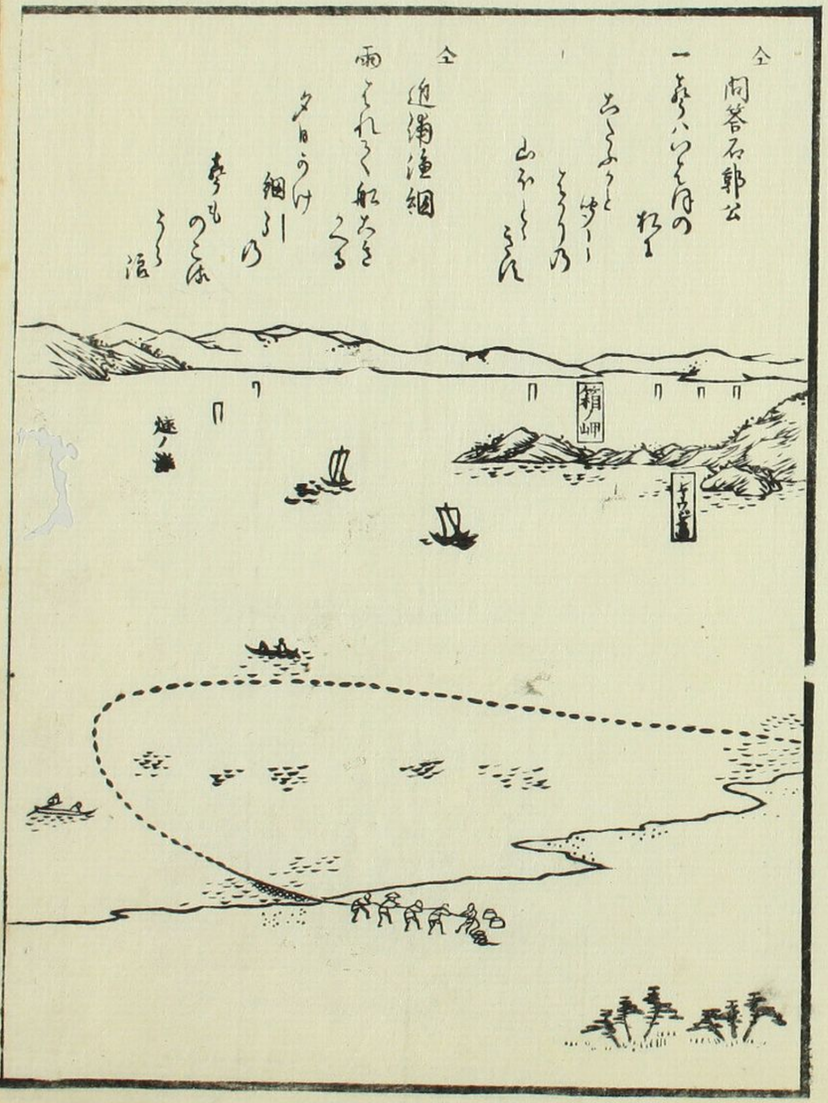
辞して遁世し是より延宝の年中まで師と雲霞のごとくくらしまた勢州にうつりしが後より東武深川に住居し庵の庭に芭蕉を数多栽て楽しみけるより人住庵を芭蕉庵とよび芭蕉翁と称せらる其頃年いまだ四十歳にいたらざるに此道の師となし季吟湖春父子も翁の号をよべる事も偏に隠操の等しきなり始の名ハ桃青といひ別号を風羅坊と云ひしも芭蕉といへるに等しく風に破れやすきをもて観せしとぞ一名を泊船堂と号せるハ深川ハ海に近き地にして門に泊る東呉万里船の詩の景にかなへバなるべし俳諧の道に遂に正風体を興起し一家を成し道を慕ふ徒蟻のごとく集りて門に入るもの枚挙すべからず元禄七年十月十二日浪花南御堂前花屋の別屋にて没す行年五十一歳

有明ノ濱

琴弾山の麓の濱をいふ当国第一の絶景なり

有明は濱やまつしらしぶなる　蒼虬

有明濱
十八景
有明落雁
白妙の濱の
真砂に
有明月
かげとたとうて
雁そおちゆく
西尾秋森
青そふる森の
濱の真砂れや
あとう深れ
秋の
月かち
稲ツミ山
十ヶ峰
ツノモ山
象ノ鼻
山口ノ水


同答石郭公
一番ハつそ屋の
ちくふうと
ゆすーー
ちくちの
山ふしくれん
迫間漁網
雨くれく船ちを
ちるる
夕日うけ
網引の
春もの
うくる
浜
稲ノ山
ヶ峰
迫ノ浦

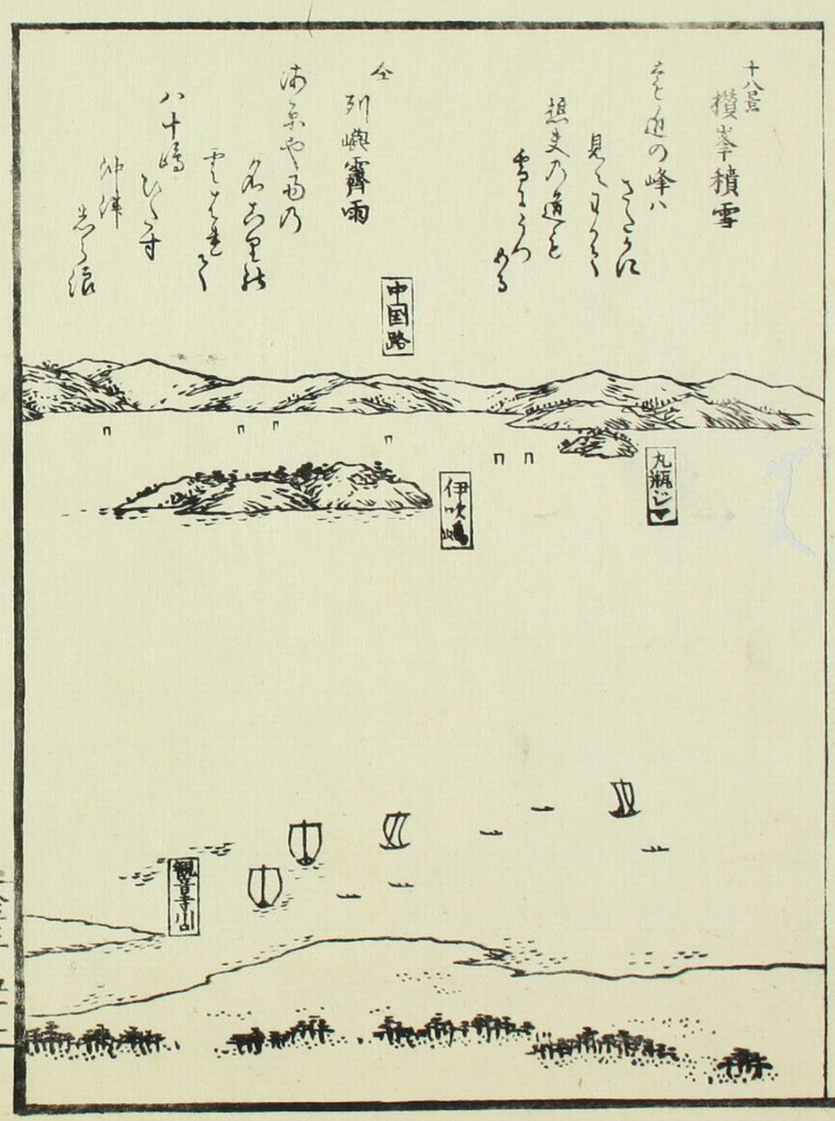
十八景
横峯積雪

そとの浦の峰ハ
見くるしく
雪ぞ乃通を
ちらさじかし

中国路

列嶼霽雨

海原や西の
名高き松
ちらさじ
八十嶋
仲津

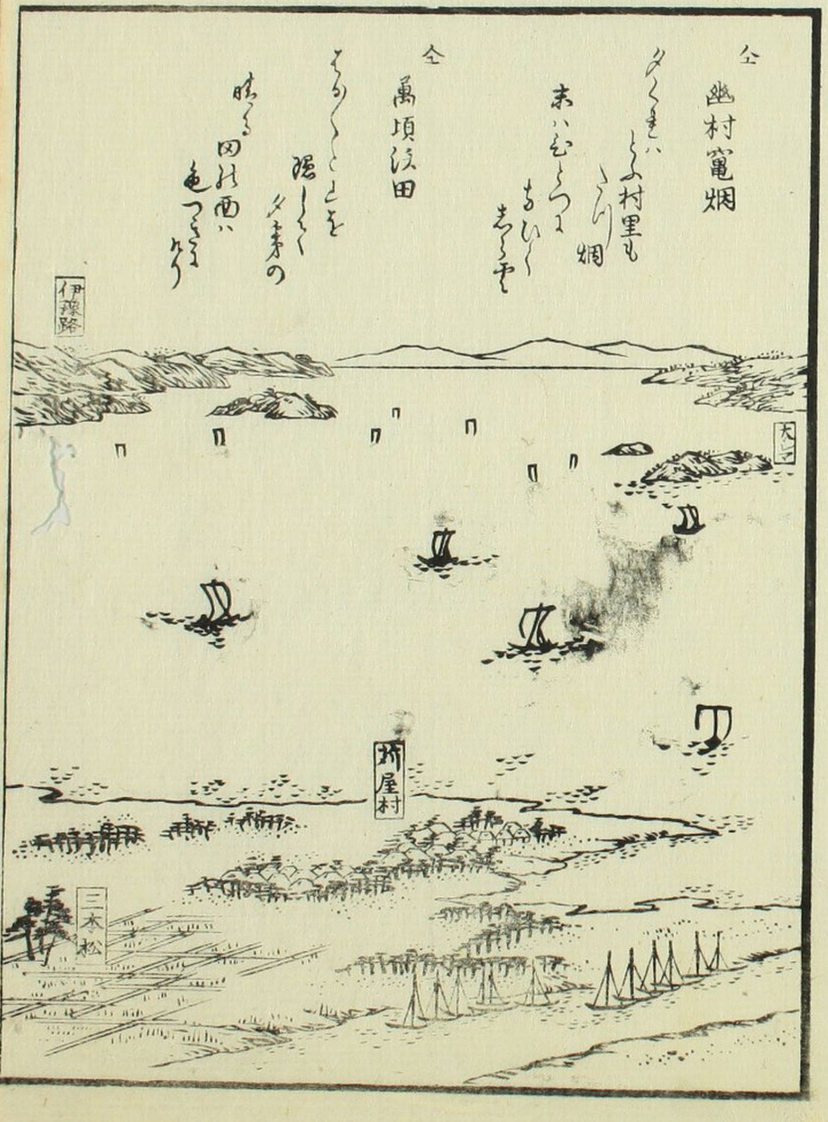


幽村竈烟

夕くれハ
村里も
烟
未ハ
ちらす
ちいく
ちらす

萬頃汲田

ちらすとを
ほしく
夕暮の
時雨
田村西ハ
雨つゝ
ちらす



花明や淀陰寂しくふりを雨　公信美

不枯の夜ハ有明乃ゝ海棠　舟静

山口ノ清水

禁の崖ニ湧く金剛水ともいさゝか堪きたる大師ゆゝせの山所ゝそ殘迹といへ清水とりて日用ふに

清水の辺りの岨ニ湧く形ち悪魔の面ニ彷彿〳〵

悪魔石

燧灘九瓶島大嶋伊吹島　もゝ有明の浜の向ふニ湧く就中伊吹島ハ家数三百計あて此里ニ観音寺の坊中泉蔵院在住に

高谷神社　高谷村稲積山ニ湧く高稲積宮と云ふ豊稲積〳〵も云稲積明神と称ス

祭神　一座　木花開耶姫命　延喜式神名帳ニ出

二代實録貞観六年九月十五日戊辰讃岐国正六位上高谷ノ神授従五位下

不動ノ瀧　稲積山の後方岡本村ニ湧く委〳〵ハ拾遺の巻ニ図ス

一夜菴　琴弾山の連峯七宝山奥昌寺の境内ニあ〳〵山崎宗鑑ゆゝ幽居そこゝ菴中ニ宗鑑の像と安置委〳〵ハ拾遺の篇ニ出ス

宗鑑ハ近江國の住人ニて綿方宗縁の長子支那孫三郎と称ス又通稱寛三郎〳〵ハ乾山光琳の兄也ハ足利家ニ仕へ後城南山崎ニ隱遁ス故ニ山崎と称ス書法光悦流ニ連一連歌および俳諧ニ能ス天文十二年ニ没ス年八十五〳〵ハ一夜菴の説結さまゝ有ものゝ説ニ洩ス

伊勢之郎義盛智謀之古趾　琴弾山の麓ニ古趾の標あ〳〵盛衰記ニ云義盛十七騎ニ以て感直ハ三千余騎と従一時出會一呼

元暦年間源義経屋島ニ平家と合戰の時分平軍阿波民部大輔成能ハ子息傳内左衛門尉成直ハ三千余騎ニ率して河野四郎通信と攻ん〳〵

伊豫國（越〳〵）ハ閉〳〵と義経伊勢之郎義盛ニ命じて渠と召捕て来る

べし〳〵下知ゆ〳〵義盛義つゝ先下龍の男一人と呼出し脛巾とさせ裏笠小旅籠ゆゝ持せ傳内左衛門ニ伺ひ遇ゝ言べき様と示し〳〵教へ

一日路先ハ立せて伊豫の國（越）さゝの義盛ハ十七騎の良黨と具して一日路後まて向ひゝ人〳〵ゆゝ見て是ハ嗚呼あゝ為業ゝ僅ニ十七騎の

金三ノ五十三

伊勢三郎義盛謀を以て傳内右衛門成直が三千余騎を降参せり

油ひかれし雪の
四とかりくるくれ
南橋

勢とりつてこ千余騎の兵を召捕んとゝ企うる大膳ゆうと言いつくるる
傳内左衛門ハ河野が鉢向ひ一らゝも通信ハ屋島の合戰に加はりて國ゝの
らぶきバ殘る家ゝ郎等と尋く討取諸ゝ火とうけ生捕ゝも許多弓連
て屋島の合戰もえ來ゝて伊豫の國ゝ淺海とさゝて帰ゝる道ゝ
彼下鶴の男小會ゝ成直殿と見て已ハ何所ゝ何國ゝ通る者ぞゝ問ふ屋
島ゝう伊豫ゝ罷る者ゝて候ゝ答ふ備屋島ゝハ合戰いくゝと問ふ男答
つて云様伊豫國の河野四郎殿の伯父福良新ゝ郎殿の頭實檢の日源の
九郎判官ゝ沼のつて雲霞の勢屋島の内裏ゝ押寄せ夥ゝ軍ゝて候
ひゝが源氏の爲ゝ内裏と燒きて平家船ゝ來て下會ゝ戰い給い程
平家ハ無勢源氏ハ多勢ゝれバ終ゝ平家負て生捕ゝるもいくゝもとる
あゝて其數どもゝ中ゝも阿波の太輔どの降人ゝ来ゝれ河野四郎殿ハ千余騎ゝ

て屋島ゝ馳つゝ其余四國九國ゝう軍勢數萬馳集りて阿波讃岐の浦ゝ源氏の軍
勢充滿ゝゝ結て過ぬ成直河ゝう心弱ゝ其父氏部太輔も降人ゝ出ゝゝ河ゝ
ゝ夢以て聽ゝゝ去ゝゝ下鶴の縅の妻ゝれバ信用ゝゝ尚も實否を
河内ゝ馬と打ゝ行行ゝ讃岐國

源平盛衰記に云木郡琴ゝ造宮ゝいゝ考ふる小ゝ木郡ゝ琴ゝ造宮ゝいゝ考ふる区ゝ木郡
東濃ゝて西ハ香東山田の二郡ゝうゝ東寒川郡小列ゝ南阿州阿波郡ゝ隣る然
ゝハ伊豫國ゝ到る便ゝ新もゝ是今ゝ豊田郡琴彈宮ゝゝ豊田郡ハ西讃ゝゝ
西ハ伊豫國ゝうゝ往返の街道ゝ東ゝ藤りてこ郡ゝいくゝ豊田ゝこ郡に
浮遊いこ郡ゝこ本ゝ宮ゝ琴彈ゝ琴ゝ造ゝ書損ゝゝ

豊田郡琴彈宮ゝの小所ゝて伊勢三郎義盛ゝ傳内左衛門ゝ行會ゝう三義盛鎧踏
どゝう杖つゝあまゝ傳内左衛門ゝ見ハ辯目ゝ是源氏の良等ゝ伊勢三郎義盛と
いゝ者ゝ平家ゝ爲ゝ鳴の軍ゝ負け内裏ゝ下人ゝの家ゝ皆焼ゝ大臣どの父子小松どの公

逆耻あるべ[illegible]虜らを給ふ汝が父民部の太輔頼と延て降人を召し櫻間の太夫八
勝浦にて虜る此二人義盛頼を汝が父八降人うまゝ頼と延て櫻間の太夫を
遣まゝ〻源氏に隨ひ奉るべ汝猶意趣あるか父の顔とも見故郷に帰らん
と欲ば義盛頼して善ふ計らん斯りと背き給へ通し侍るまゝ〻
取直し失束と解し成直八さに下臈が詞にいい今義盛が演言相違かと
思いれば父降参の上成直りて同じ事にてうと弛甲と脱らて義盛
に従ふ義盛降人の法として大将の許に将向ふ是義盛が縛にてなり僅か
十七騎ばかりにて二千余騎と容易く従へ〻て古今に雙びなれ勲功なきべ判
官あれと賞し給ふ又民部太夫実に降参せしにつゝ既に成直屬
らまわし同且平家の軍覚束なく思ふ折〻成直大将の命にて父に状
と遣て源平之合戰勝劣雲泥也後勘有恐前降源家早任同心之思必逐面

謁之志く書り斯し程ふ成能も源氏に順ふ故に彼國の住人等皆天〻〻く
源氏に屬ぬと云

金毘羅参詣名所図會二之巻終